

---

# 銀の首輪の小英雄

凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の首輪の小英雄

### 【Nコード】

N48840

### 【作者名】

凜

### 【あらすじ】

夢から覚めると男は牢獄の中にいた。手足を鎖で繋がれ、首にも銀の首輪が括り付けられている。ある時男は牢獄を逃げ出した。そして懸命に野を駆けた。すると逃げた先に居たのは傷を負った一匹の竜。親しみの時を経て竜は死ぬ。そして男は力を得ていた。

成り行きと秘密の物語

残酷な描写がありますので

苦手またはお嫌いな方はあまりおススメ致しません。途中途中にコメディやほのぼのとした話を入れる予定ですが主にシリアスです。

御注意下さい。

現在更新休止中 早めに戻ってきます。書き溜めはします。

## 序章

夢を見ていた。

私は王だった。

幾千の兵を従え行軍していた。

夢を見ていた。

私は蟲だった。

群れ行き最後には儚く散った。

夢を見ていた。

私は物だった。

動くことなく永遠の時間に思えた。

夢を見ていた。

私は雲だった。

流れ行くその様は実に優雅だった。

夢を見ていた。

私は空だった。

眺めた景色は実に壮大だった。

夢を見ていた。

私には何も無かった。

孤独、寂寥、悲哀、幾つもの感情が溢れた。

私は、私は、私は一体

## 第一章巻記「監獄の男」

男が目を覚ますとそこは牢獄だった。

酷寒の牢内では吐息が白く幻想的に立ち込める。

目が覚めたばかりでは体が凍えているように思うように動かすことができない。

少しの間、目を見開き微動だにしなかった。

「またこの夢か……」

口を開いての第一声が其れである。

その響きにはどこか物憂げな雰囲気を感じられる。

「……寒い」

男は何も着ていない。衣服の類を何一つ身に付けていない。全裸。

その肉体は痩せ細り、今にでも折れそうなほどに脆い。

「もう何度目だろう……」

物憂げな表情は幾分か晴れ、顔に表情が戻ってきていた。だが、それでも、まだ

無表情。

「ぐ、うう、あう」

呻きながらも懸命に体を起こす。  
節々が鳴り、痛々しい。

「はあ」

ため息とも、吐息ともとれる曖昧な息が発せられる。

男には記憶が無い。  
何故こんな所に居るのか。  
自分は一体何者なのか。  
何時から此処にいる？  
何時まで此処にいる？

いつも目を覚ますと真っ先に考えること。  
もう何度繰り返しただろう。  
黒岩に覆われて出来ている牢獄の壁をボーっと見つめていた。

「来たか」

おもむろに首を檻の外へと向ける。  
牢獄の奥底から靴音が段々と近づいてきた。  
近づくにつれ、靴音にも重みが増し腹に響くような大きさである。  
男の牢の目の前に歩み寄るのは、常人の倍はあろう体軀と背を持  
つ偉丈夫。

「ぐうふふふふふふ、まだこのじがながぎたど」

舌が足りていないのか、おつむが足りていないのか、涎を垂らし  
ながらニタニタと笑うその姿は酷く醜い。

偉丈夫の体は燃え盛るような赤い色。赤に相對するように蒼き剣  
を身に纏っていた。

「ぎょうは、どぐべづなえやにいぐど」

無理やりに立たされ、何も身に付けていない細い体を軽々と持ち  
上げられる。

軽く抵抗は見せたものの、肩にがっしりと締め付けられると逃げ  
ることは出来なかった。

「んはあーはあはあああ。ふん、ふんふー」

何かの歌なのか、醜い濁声が牢内に響き渡る。



牢獄の中にはいくつもの区切られた檻が点在しているが人は居ない。

「あらよっど」

視界が安定しておらず世界が歪んで見える。  
元に戻ったときには既に拷問具に組み込まれていた。

周りを見れば、背の尖つた木馬や真鍮で出来ているらしい雄牛、様々な種類の鞭、フオークが幾重にも重なつて出来たような形をしている鋏、外見が少女を模した鉄製の棺など用途も分らない物ばかりだった。

キリキリと左右で音が鳴るとともに頭の締め付けが強くなっていく。

締め付けが強くなり、次第に我慢ができないほどの痛みが脳を襲う。

あ あ あ  
あ あ あ  
あ あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ

抵抗は出来ない。

痛みでそれどころではない。

頭が割れる。

割れる、割れないの境目で上手く強弱をつけながら長時間に渡り  
拷問は続けられた。

寒さなどはもう感じない。意識も途切れ途切れに痛みが波のよう  
に襲い来る。

「おお？　もうくたばっただのが？　むう……ぎょうはこれでやめにするか」

体が揺れ、浮遊感が全身に伝わる。

不意に落下し手足に鈍痛が響く。

どうやら元の牢獄に戻されたらしく安堵がの情が湧き上がる。

安心と疲労が相成って睡魔が襲ってきたようだ。

抗うことはしなかった。

途絶えた意識の中、  
黒岩の地面に木霊する、

竜の咆哮。

## 第一章巻記「監獄の男」（後書き）

閲覧に感謝。

## 第一章式記「咆哮」

男が目を覚ますとそこはやはり牢獄だった。  
別に期待はしていない。

これが常、これが日常。

寒さに震え、苦痛に悶える。

それが常、それが日常。

「……………」

目を見開き無言を貫く。

黒き瞳に映るのは黒岩の壁。

「違う」

夜が過ぎ朝が来て目を開けばいつも思うこと。  
其れが今日は沸いてこなかった。

「違う」

何かが違う。

何が違う？

一体…………？

「夢を視ていない……?」

男は夢を視ていなかった。

気づけば此処に居て、いつもみてきたこと。直ぐ傍に片寄って共に生きてきた。

常、日常、いつも。

非日常は突然にやってくる。

この日は男にとって革命の日となる。

いつまで経っても醜い偉丈夫はやって来なかった。

常は、日が昇りきった時に決まってやって来る。  
だが今日は日が昇り、傾き始めても未だに来ない。

やはり何かが違う。

凍える身体を無理矢理動かし、檻の出入り口へと近づく。

施錠されている筈の扉へと手をかけた。

そつと極小さな力で扉を押すと、きいという音を立ててゆっくりと扉が開く。

一步、二歩と歩みを進め牢の外へと踏み出した。

「……嗚呼あ」

男の頬に涙が伝う。

必死に留めようと上を向いたがそれでもまだ溢れてくる。

思えば、男は此処に居てあんな仕打ちを受け続け、一度も逃げ出そうなどとは考えたことはなかった。

凍え死にそうになっても、苦痛に呻きながらも、一度も逃げ出さうとは思わなかった。

「外……」

三歩、四歩、五歩、六歩、と順々に足を動かす。

土を踏み締め腰に力を入れる。

地面は抉れ足の裏に泥が付着する。

黒岩の地面に比べ温かいその土塊からは芳醇な香りが漂う。

目の前にあるのは光が漏れるこの牢獄の出入り口。  
いつも此処から偉丈夫はやって来る。

この先には未だ見ぬ世界が存在しているのか。

男は扉に手をかけ勢い良く押し開けた。

煌々と差す日射が何かの鉱石らしき物に乱反射し辺りにまたたくその様は、まるで光が蒼空から降下し煌びやかに揺れ動いているかのようなだった。黄と碧に包まれた空間は慣れない瞳に痛みを与えるほどに美しい。

目が慣れてくると次第に、凝然としているこの場所がどんな所なのかが見えてきた。

足をつけている此の場所はさながら処刑台であり、男はその上に佇立する囚人に見える。

処刑台の周りには段々になっている観客席のようなものが敷き詰められていた。

観客席からは囚人を見下ろす形になるのだろう。

だがこの場所において全てに共通する事柄が在った。

全てが既に風化していたのだ。

赤茶けた処刑台の扉、緑黄の蔦の這う壁、罅裂し原型を留めていない観客席。



全てに於いて時が過ぎ去っていた。

「これが外？」

男の顔には驚愕と落胆の色が見て取れた。

「そんな筈は……！」

夢を見てきた。

外は、夢のように壮大で優雅で儂く永遠で豪奢である筈だ。

今一度あの夢のような光景を目にすることはできないのか？

これが全てなのか？

これが世界なのか？

男は嘆き悲しんだ。

嗚咽は響き反響する。

反響した自分の泣き声と共に何かが微かに聞こえてくる。

「……………咆哮？」

苦しんでいるような、怒り狂っているような、絶望しているような  
そんな感じの鳴き声。

其れは徐々に大きくはつきりとしたものに变化していく。

地響きと地鳴りが同時に耳に入ると身体は勝手に動き出していた。

「行かなきゃ」

男は走る。懸命に走る。運動などとは無縁だった身体で。激痛に耐えながらも走る。

風化した観客席を駆け上り蔦の這う壁をよじ登る。

その先には荒涼とした砂地が辺り一面に広がっていた。

まだ諦めない。

首をあらん限りに振り回し視界の先に何かが無いのかと捜し求める。

その間にも咆哮は大きくそして強くなっていく。

「……あれは」

目を凝らし一点を見つめ続けると辛うじて視認できるほどの大きさで羽ばたく『何か』が見えた。

その何かは一目見てあるものだ と確信する。

降り立った場所へと再び走り出す。

痛みなどは感じない。

心にあるのは好奇心と同居する高揚感だけだった。

## 第一章式記「咆哮」（後書き）

閲覧とお気に入り登録に感謝

## 第一章参記「竜」

荒廃した大地に相応しくない木々が鬱葱と生い茂る深山幽谷。  
今そこに降り立つ尊大な存在があった。

漆黒の鱗に全身を覆われている。

節々から鋭利な棘を生やしその爪と牙からは毒々しい液体が滴り  
落ちている。

豪富な宝石にも負けない輝きを持つ瞳と山をも飲み込めそうな大  
顎を持つその巨体は、

時折、息苦しそうに呼吸を繰り返している。

呼吸を繰り返す度に見え隠れする生々しい傷口のあるその背には  
無数の鉄塊が突き刺さっていた。

竜

この世で敵う者はいないとされる最上の種。

誰もが崇め誰もが敬い誰もが慄く。

その存在はその位置する空間に蟻の一匹も入れることを許さない。

それがどうだろう。

竜の目の前には風采の上がない貧相な身体をした人間がヨロヨ  
ロと立ち尽くしている。

「はあ……はあ……はあ……はあ」

肩で息をしている男はその姿を見せてから竜への視線を外すことはなかった。

竜も男も相手を見続ける。

無音。

森林の樹木達が耳へと音を届けるのみ。  
永遠の時間にも思える。

遂に一方が口を開いた。

『何故此处に居る？』

音を発したのは大口を開いた竜だった。

『何故此处に居る？』

再び疑問を呈する。

「お前が見えたから……」

返答は単純で簡素なもの。

『此処はお前の来るところではない。眠りを妨げおつて。起き掛けに見るのが美味そつな肉ならまだしも、人間の顔など見たくも無いわ』

竜の口から発せられる音は必ずしも人間の理解できる言葉ではない。

耳に入るとしても唯の唸り声としてしか受け取られないだろう。

だが、男には何故かその意思が伝わっていた。

こんな人間など今まで見たことがない。

ましてや自分の姿を目視して逃げずには居られない筈。

にも関わらず、この男はそんな素振りを見せる気配は無い。

「そんなことを言っても、お前怪我してるじゃないか」

男の声の後に再び長い沈黙がやって来る。

だが、またしても沈黙を破ったのは竜だった。

[illegible]

笑い声。

これもまた常人には唯の鳴き声としか取られない。  
それでもやはり男には伝わっていた。

男の顔にも明るい表情と笑顔があつたのだから。

恐れおののき、畏怖し、絶望する。

竜の追憶の彼方に残る人間の思いはそんなものばかりだった筈だ。なのに、この男は怖がるどころか傷口の心配をしているというのだ。

これで笑っておらずにはいらなかった。

滑稽、変わり者。

だが、それはそれで興味も沸いてくるというもの。

『お主、名は？』

「名前？ 無いよ」

『む？ どういうことだ』

「名前を知らないんだ。自分の」

世界の最上種と会話をしているといのも凄まじいがその胆力もまた凄いことだ。

無知は罪、とでも言おうか。

「君は？」

「私か？ 私の名前か。 そうだな、強いて言うならば」

フェルニゲシュ

「そう。 フェルニゲシュ。 うん。 其れが私の名前だ」

面白がるような目つきでこちらを眺め、微笑している。  
何が可笑しいのかは男には分からない。  
分かる必要は無いのだ。

「フェルニゲシュ。 良い名前なの、かな？」

竜は微笑から苦笑へと笑いを変化させた。  
その様相はさながら困った父親のように。



『ハッハッハ。そうだなお前達人間の中ではどうなっているのか知らない、知りたくも無いが私自身はこの呼び名が一番気に入った』

「うっ、御免……気に障った？」

様子を探るその姿は、竜からすればまるで愛玩動物の仕草をみているにも等しかった。

愛らしいとも言えいいのだろうか。

『気にしなくていい』

既に竜からは覇気が消失していた。

いつの間にか有った筈の圧迫感が解け、随分と楽だ。

竜と男の周りにも、生けるものが姿を現し本来の森林の姿を取り戻していた。

「面白いね。外にはこんな所があつたんだ」

木々の間を縦横無尽に駆け回る小鹿の群れ。  
枝々に飛び移り器用に木の実を食む栗鼠達。  
清流の流れに逆らい力強く泳ぐ魚。  
色とりどりの花、草、葉。

全てが男にとって新鮮だった。

『嗚呼』

森の深奥に佇む一人の男と一頭の竜。

不釣り合いなその光景は木漏れ日に照らされどこか神秘的なものだった。

## 第一章参記「竜」（後書き）

閲覧とお気に入り、評価して下さい。方々に感謝。

## 第一章肆記「御伽噺」 上

竜と男の邂逅からある程度の年月が流れた。

男は時間の経過と比例するように知識を得た。

動物のを捕まえる方法。

魚を捕る方法。

木の実の判別。

食事・調理の仕方。

衣食住に関する知識。

その土地土地による最適な身の運び方。

身を隠し相手に気づかれない方法。

体術。護身術。

体の使い方。

全てが竜によるもの。

口で人間は嫌いだとは言うが思いの外、人間社会に精通していた。

「フェルニゲシュ。君は何故そう天邪鬼なんだい？」

『何が言いたい』

「君は、口では人間なんぞ嫌いだ。なんて言ってるけど、それがどうしてこうまでも色々な事を知っているのか不思議に思ってるね」

『そんなことが……』

竜      フェルニゲシュは嘆息を吐き懐かしむような口調で言った。

『私はお前達の考えが及ばない程太古から存在している』

『太古には人間と竜の共存の世界もあった。そこにはある事柄一筋に恐ろしいほど熟達した者達が大勢いたのだ。木匠、工匠、棟梁にも掛け合いもした。狩人に効率的な狩猟の方法を学んだ。生肉しか食べていなかった我々に味の付いた食事を教えてもらったのも人間だ。知識人に文化というものも受け取った。竜の歴史の根幹にはいつも人間が居た。まあ難しい事を言ってもお前には分からないだろうが……』

「いや、何となくだけ分かるよ。だけどそんな事を聞いたら益々不思議に思うよ？ 何で人間が嫌いなのださ？」

疑問が疑問を呼ぶ。

それほどまでに親しみを持っていたならば憎むべき対象にはなり得ない筈だ。

共生をなしていたというのならば均衡もとれていたのだろう。  
なのに何故？

『ふむう……………本当にお前は何も知らないのだな』

竜は首を傾げ、物思いに耽るように空を見上げる。

その情景はまるで老いさらばえた老人が日向に出て茶を飲むようにも、  
にも、

聡明な青年が息抜きで日光浴をしている時のようにも見える。  
要するにばーっとしていた。

『一つ、御伽噺をしようか』

どこか遠い遠い見知らぬ国に、大層見目麗しい美しき王様とお妃様がいた。

その二人は婚儀を行ってからまだ日も浅く、それでいて仲睦まじいとてもいい夫婦。

珍しいことに、この二人は政略結婚などではなく恋愛の末の婚姻というその仲の良さが納得のいく関係だったそうだ。

その国では、王とて妃の事を蔑ろにすることは出来ないよう法に定められており、妃にも王と同等の権力が与えられることになっていた。

もちろん正式な側室として迎え入れられるには乙女であることが必須であり、婚前に手を出すなどは持つての他だ。

王が初めて妃の身体に触れることが許されるのが、婚儀から二度上弦の月を垣間見ることができた後であり、それまでは絶対的な禁欲を押し付けられるのだ。

王様はそんな生活にも耐え、上弦の月を見ることができ、意気揚

々と妃の待つ寝室へと駆けていったそうな。

長い夜の末、無事に初夜を明かすことが出来、安堵と幸福感に包まれる王宮。

早朝、妃の悲鳴が宮内に響き渡る。

王宮の皆の安堵が一瞬にして焦燥に変わる。

何事かと自室に戻っていた王様が妃の寝室に入るとそこには、

血塗れの寝衣を着て、頬に涙を伝わせる、糞れた顔をした、妃が佇んでいた。

王様が事情を聞くと

「夢に化け物が出てきて、お前には子供が出来ないと囁かれた。目が覚めても夢を思い出して怖くなり、寝具から離れようとするとき純白だった筈の寝間着と寝具が真紅に染まり何かの紋様が浮かんでいた」

と。



後に妃の親身には傷一つ無かった事が分かり、更に此の面妖な事件が表立つようになった。

その後、数年に渡り幾度と無く二人は身体を重ね合ったが終ぞ子供ができる事は無かった。

愛子に恵まれることがなく、隣国との戦争に王様との蜜月も少なくなる。

自身の不甲斐なさに気を落とす御妃様。

何とかならぬかとかと国中の呪い師に掛け合い、子宝に恵まれると言われる妙薬にも頼る。

だが、やはり継子が生まれることは無くとうとう婚儀の日から十年が経とうとしていた。

十年目の丁度その日。

庭園を眺めていた妃が一人の老婆に目を留めた。

暇を持て余していた妃は暇つぶしにとその老婆に話しかける。

すると、老婆だったはずの其れは、醜怪な物体へと変わり果てる。

物体は言う。

今日の日没に皿を庭の西北に裏返して置いておく。

その後、日の出の時その皿を取ると紅白の秀麗なバラの花が咲く。

赤いバラの花弁をを食べれば男の子、白いバラの花弁なら女の子  
ができる、と。

妃は欣喜雀躍きんぎやくやくした。

早速、提言された事を行動に起こそうと走り去ろうとした時、再  
び物体は言った。

ただし、絶対に二つとも食べてはいけない。欲に負けて食べてし  
まうとこの国に多大な災厄が降りかかるであろうと。

妃は興奮のあまり、話し半ばにしか聞いていなかった。

日没後、言われたとおりの場所へ行くとそこには裏返しに置かれておる豪華な皿があった。

妃はそれを見つけると益々興奮し、日が明けるのを今か今かと待っていた。

時が満ち、陽光が暗闇の中から煌々と顔を出す。

すると、妃の目の前で不可思議なことが起こった。

光輝が豪華な皿に反射し、皿の紋様が立体的に写る。

その紋様はいつの日か見たあの紋様であり、恐怖が蘇る。

身を震わせながらもその様子を凝視していると、閃光が彩光に変わり彩を増す。

それはこの世のものでは無い物の様だった。

赤、青、黄、緑、紫、白、黒。

色光が織り成す形は薔薇の花。

茨から花弁、雄蕊や雌蕊。

その細たる形象は刺々しい薔薇が優艶に見えるほどだ。

具現化されたそれは真紅の花弁と純白の花弁を持つ薔薇の花。

得体の知れない物体の言っていた事は真実だった。

輝いて見える二色の薔薇を摘み取り手に乗せる。

真紅は引き込まれるような赤。純白は穢れを知らないような白。

これを食せというのか。

妃はこれほどまでに美しいものを見たことが無かった。

諸国からの贈り物として受け賜る宝石や装飾品をも超える至高の一品。

だが、これを食べなければ子を為すことはできない。

意を決し、赤い薔薇を口一杯に頬張った。

花弁を一房噛んだ時、口一杯に広がる芳醇な香り。

花独特のあの匂い。

それが何故だろう。

美味しくて美味しくて仕方が無いのだ。

また一房食む。

更に強く香る匂いと味。

薄い、とても薄い花びらの筈がまるで、肉厚で脂のことこのっ

た肉を口一杯に頬張ったかのようだった。

噛めば噛むほど味が広がり留まる事を知らない。

いつしか、妃は薔薇の花を食す事に夢中になっていた。

薔薇の魅力の虜となってしまったのだ。

食べて、食べて、食べ続け、遂には赤い薔薇が底をついた。

空腹時に感じるあの焦燥感がやってくる。

食べたい、食べたい、食べたい、食べたい、たべたい

薔薇の魅力に魅入られた。

『欲に負ける』とはこのことだったのだ。

白い薔薇を食べてしまえば子をなすことが出来なくなる。

それだけは嫌だった。

王様の辛い顔を見たくないのだ。

早く子供を作って、笑顔を取り戻したかった。

だがそれでも薔薇の魅力は引けを感じない。

どうしても諦めきれない。

相互の意思が闘<sup>せめ</sup>ぎ合い頭痛が走り地面に倒れ伏してしまう。

暫くして身動きが止まりフラフラと夢遊病者のような挙動で立ち上がる。

白い薔薇を摘み取り、そして……

口にした。



## 第一章肆記「御伽噺」 上（後書き）

更新遅れてすいません。

御伽噺は上下の予定。

閲覧とお気に入りに感謝。

ユニーク数1000突破。

今後ともよろしく願います。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりソーラン節を踊りだします。

## 第一章伍記「御伽噺」 下

月が満ちれば妃のお腹も大きくなった。

隣国との戦争も条約の締結により休戦状態となった。

帰還した王様は妃の妊娠を聞いてこれまた狂喜乱舞したそうだ。

何も心配することの無い幸せな時。

だが、やはり、幸せは崩れ去る。

お腹の子が産まれいずる時あの老婆が再び妃の前に姿を現したのだ。

老婆は言つ。

災厄が訪れる、この運命からは逃れられないだろうと。

その言葉を聞き顔を青ざめる妃。

周囲の者は老婆の無礼な物言いに癩癩を起こしこの場から離れるよう妃に促した。

護衛に引き連られながら背後を振り返ると老婆は何処にもいなかった。

日付けが変わり遂に赤子の鳴き声が響き渡る。

それは咆哮。それは怒号。それは絶叫。

そう、赤子はなんと一匹の竜だったのだ。

王と妃は嘆き悲しんだ。

恩恵を受けたというのにこの有様。

崩れ落ちる王に竜王子は言った。

貴方が私の父なのですね、と。

王は否定する。

人間ですらないお前は私の愛子などではない、と。

再び宮内に響き渡る大音声の声音。

貴方が私の父と認めないなら、城も宮も貴方もこの国もその全てを叩き潰す、と。

王は決意を迫られる。

王は苦慮する。

王は決断する。

竜王子の成長は異常だった。

三月も経たぬうちにその体軀は伝説に語られる竜の身の丈に匹敵するほどの巨軀へと成長した。

爪牙は鋭利に伸び、顎には不規則に動く髭の様なものが。

紫水晶の煌めきを残す鱗を身に纏い黄金の瞳を有す。

尊大、偉大、寛大。

全てに於いて大きい。

竜王子が誕生して十五年。

唐突に妻が欲しいと言い出した。

無理だと王は言うが国を潰すと脅され、隣国の王女を迎えることとなった。

竜王子が待つ寝室に通される王女。

数瞬の後、王女は命を落とす。

竜王子が食べてしまったのだ。

再び竜王子は妻が欲しいと言う。

王は抵抗が出来なかった。

人を食す口実と分かってはいた。

だが、それでも抗うことは出来なかった。

二人目の王女も竜王子の腹の底へと消えていく。

連れて来た王女達の国からも、娘を殺されたと戦争に発展する。

その後も、幾人も女性が竜王子の腹へと向う。

竜王子の食欲が欠くことは無く、むしろ日に日に増していくほどであった。

国の士気が猛ることはない。

国家間の戦争による土地の荒廃と人民の疲弊。

更には竜王子の妻の娶り。

人民には謎の奇病が流行り、宮内の者達も多く倒れたと伝えていた。

無論、正室や側室として娶られた女達も例外ではない、と。

だが、そんな事が虚言であることは皆黙認していた。

竜王子の存在は宮内、城内の奉公人や騎士達によって内外に漏洩していたのである。

その存在の恐ろしさ、禍々しさ、それに伴う神々しさは国中に蔓延していたのだ。

抗いようが無かった。

抗うことが許されない状況へと陥っていたのだ。

今宵もまた、美しき御仁が竜の血肉へと変わり果てる。



『御伽噺はこれで終わりだ』

「へえ……え？」

『オチも何も無いのだよこの御伽噺は……強いて言うならば今後この国は竜王子に苦しめ続けられ遂には滅んでしまいましたとき。なんて終わり方も聞いたことがある』

男は愕然とした。

これではあまりにも酷すぎる話ではないか。

救われるべき民の苦しみも王様と妃様の幸せも糞もない。

「こんな話が本当に御伽噺として語られているというのか？」

納得がいかかった。

男は自分の知っている御伽噺は全て勇氣に満ちていて、正義とは

言えなくても少なくとも主人公が何かを救い、助け、導く、そんなものだと思っていた。

まるで小さな子供のようにそれに嬉々と耳を傾けていた自分が惨めになった。

『御伽噺や伝承なんてものには戒めの気を込められて作られたものが沢山あるんだ。主人公がいつも正義とは限らない。お話の主人公を反面教師として子供達を戒めて縛る事もある』

「それは、良い事なのかい？ 悪い事なのかい？」

男には善悪の区別はまだ分からない。  
だからこそ聞く。

『人間達としては良い事なのかもしれない。だが我々の立場としてはあまり良い事ではない。確かに戒めのおかげで人間達が我々に近づくことはなくなった事は事実でもある。だが人間達も我々も互いを嫌い合う輩ばかりではないのだ。昔の思い出を追って、竜の記憶に永劫残る仲たがいをした我々と人間達の仲を再び戻そうとし竜はいた』

『我々の長き命と違い人間は短命だ。我々が長きに渡る因縁として残っている記憶も楽しげな思い出も今続く現実として視覚していることも、人間達は忘れ去っている。文献や伝承には文化として残るが、そんな素晴らしいものを手にすることが許されるのは大抵が人

間社会で富裕層と呼ばれる者達ばかりだ。少数ながら本来の我々を理解し打ち解けあう者もいたのだがそんな輩は異端者として、友好を図った竜族は化け物として、迫害された』

『まあ、何が言いたいのかというと、大人の戒めと言う名の欺瞞で出来た伝承を子供達が真に受けそれを信じることが我々は許せないのだ。人間社会での規則や規律の保持の為に作り話をするなんて事はまだ許せるが、それを超えた事実無縁の所業を作りたてさもそれが当然だというように広まっていくのは我慢なら無い。それが我々も我々の良き理解者をも破滅に導くのだから』

「えー、えええと……？」

『ふむ、要するに子供の教育の出汁に嘘の噂を流されて、我々も本当の理解者も迷惑しているのだよ』

「嘘？」

『嗚呼、例えば我々は人を襲って食べるとは言われているが人肉は基本食べない。食べれないのだ』

「でも、自分に会った時は肉が食べたいって……」

『アレは脅しのようなものだ。それにお前を食べたいとは言っていない』

『話を戻すが、その出汁が肥大化して恐ろしい有らぬ存在が我々として人間達に住み着いている』

『そのおかげであんな御伽噺が出来上がってきたんだ。そしてそれを聞いた子供達がまた違った認識を得る。そしてその子供達が成長して  
なんて事の繰り返しだ。あの御伽噺はその一端だ』

「負の連鎖……？」

男に善悪はない。が、それは誰もがそうである。  
人には人のものさしがある。

ある事柄に対して百の者が集まれば百の解がある。  
ものさしの長さが足りなかったり、長すぎたり。  
色が付いていたり、真っ直ぐではなかったり。

多種多様なものさしが存在している。

それはこの男も例外ではない。

男は男の、自分のものさしで目の前の物事をはかったにすぎない。

『その通り。堂々巡りだ。どうしようもない。抗いようが無いんだ。  
御伽噺の王様の様にな』

## 第一章伍記「御伽噺」 下（後書き）

御伽噺はこれでお終い。

男は記憶が無いばかりに純粹です。

竜の主観だけを丸呑みしてしまいそうです。

あと口調が安定しませんね……

伝承や童話など様々な御話の中にも侮蔑的な表現や偏見の目だって入っていることがあると思います。

まあ、どう解釈するかは人それぞれですが……  
すみません

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりフラダンスを踊りだします。

## 第一章陸記「進軍」(前書き)

場面が変わります御注意ください。

## 第一章陸記「進軍」

荒廃した土地。

砂塵の舞う広大な砂漠。

そんな荒蕪の地に仰々しく馳せる大軍団があつた。

掲げる旗は法王の尊厳さを象徴したもの。

白銀と黄金の剣を交差させ、その中央には巨大な十字架に五重冠を真紅の糸で括り付けるといふ構成。

白銀と黄金の配色は法王庁直属の騎士達の鎧と兜をモチーフに。

二対の剣は開祖が常用したとされる聖剣。

法王の宗教上保持している権力を五重冠で表している。

馳せる軍団の装束も戦をするというよりかは社交界にでも突撃しようとするかの様な正装。

やはり何処か仰々しいものだった。

「ねーねー、デニス副長おー。やっぱさっきの町にいた巡礼の親子、けっこう美人でしたよ。母親の方とか副長の好みじゃなかったですか？ 娘の方もあと幾年も経てばとびっきりのものになると思いますし」

銀の帷子に狐らしき動物を模したお面だけというなんとも不可思議な出で立ちの男が、並走している髭面男に話しかけていた。話しかけられた男はどうやらこの大軍団の副団長らしくその出で立ちも



他の者とは違い唯一鎧と兜、武具を装備している。

「このド阿呆！！ 貴様はいつもそんな感じだがな、今回ばかりはそうはいかんぞ。我々法王庁直属第六大隊が初めて猊下の勅命を承った今回の任務。失敗しては一生の不覚！！ 心して掛からねばというのに、まったくニコスお前ときたら……ぬうこの罰当たりめ！！」

狐面の男、ニコスは髭面の男の熱血に当てられたらしくゲエと舌を出してげんなりとしていた。

元々、この法王直属第六大隊またの名を無用の長物軍団やごっこ軍、お坊ちゃま軍などと呼ばれているこの軍隊はその二つ名の表している通り、全く使い物にならない軍団として法王庁内では知られている。それは兵士達ほとんどが何処かの有力貴族の跡目や婿などでその命を戦に取られたくないという思惑があり、ステータスと唯の安全策のために作られた大隊だからなのである。もちろんそんなぼんぼんの集まりにわざわざ上の役人が戦の命を出す筈がなく、実践の経験など皆無なのである。

そんな未熟な軍隊が初めて命を受けたその内容は、

リビュア溪谷に降り立つ奇跡の顕現をその瞳に収めよというものだった。

当初この命が、神明のお告げがあったと法王の口から下されたときは天上天下物情騒然の大混乱だった。

その時分に法王庁に残された軍は第六大隊しかおらず、その他の大隊は全て出払っていたのだ。

各大隊を呼び戻す訳にもいかず急遽、第六大隊が勅命を受けることになったのだ。

役人の中には最後まで渋っていた者も居たのだがそれも終いには承諾することになる。

「むう……しかし、一体全体どういうことなのだ？ 開祖様が記した黙示録にも記載されていなかったそうじゃないか、この事象は。そんな事があるとは思えないのだがなあ」

「そうですねえ、まあでも、そもそもおその開祖様の黙示録って物自体僕達は見ただことも触ったことも無いのですから、怪しいもんですけどね……」

「ぬ、ニコス、それ以上はあまり口を利いては異教徒と見なされるぞ。やはりお前さんは少し口の利き方を学んだ方が良いのではないか？」

「おっと、これは失礼。以後気をつけますよ。副長さん」

砂漠越えには忍耐と胆力が必要だ。

両とも備わっていなければ砂漠を越えるというのは自殺行為にも等しい。

お坊ちやま達にはやはり厳しかったらしく既に数人の脱落者を出していた。

そんな過酷な状況で優々と談笑をしているこの二人は案外、兵なつわもののかもしれない。

幾日も砂漠を渡り歩き、永遠とも思える時間突き進んだ。  
それでも終わりは見えてこない。

脱落者の数も日に日に増えていく一方だった。

脱落者が増えればその運搬にも治療にも人員を割かなければいけなくなる。

予想を超えた消耗の早さに団員は驚きを隠せなかった。

「副長！！　とうとう医薬品が底をつきました。食料類も段々と減ってきておりこの儘では大隊が持ちません。今から引き返せば最寄の町には辛うじて着けるでしょうし、この砂漠は終わりが見えません。そのリビュア溪谷というのも何処にあるのか明確には分からないじゃないですか」

食料、医薬品、武具などの蔵数の管理を担う団員が軍の現状とその危機についての弁舌をしている所だった。

団員の意見は至極真つ当なものでこのまま徐に突<sup>おもむ</sup>き進むと大隊が壊滅するのは必然であり避けられない決定事項。

「むう、ぬう、ぐううう……」

自慢の髭を撫で繰り回しながら悶える男の姿は酷く滑稽で正直近寄り難かった。

だが、悩むことも仕方が無い。

最寄の町で食料補給を行った際、砂漠越えを数多く経験している行商人に渓谷の位置を教えて貰い、大雑把で酷い出来だが砂漠の地図も書き記して貰っていたのだ。

その地図によると後もう少し行けば清流の流るる渓谷が待っているらしい。

「一人で悩んでいても無意味だな。団長に相談してみよう」

野宿のための仮住いを組み立て、集まり焚く暖の光はまるで此処が一つの村の様に錯覚させた。

そんな温かな光に包まれながら、デニスは中央に位置する大やぐらの中へと入る。

「キシリア団長」

やぐらの中はとても広くその中央には会議用の机が配置されている。さすがに椅子は用意していないが、それでも戦に不釣合いなほど十分豪華な物だった。

デニスが奥へ通る時には既に幾人かの騎士達が机を囲むように立っていた。

「む、談義中でしたか。これは失敬。出直してきます」

談義中とは言ったがその様相を見ればまるで若い者どうしで乳繰り合っているようにしか見えない。

「待て、デニス。変な勘違いをされたまま帰しては後々面倒だ。こっちへ来い。丁度お前を呼ぼうとしていたんだ」

会議用机の周りに佇んでいるのはこれで計五人。

南方にキシリア

北方にデニス

西方にニコス

東方に蔵数管理者

そして入り口を警護する憲兵一人。

議会は始まった。

「さて、奇跡を瞳に収めるための方針を、と言いたい所だがそうにもいかない。先ずは今後どうするか、だ。」

特徴的な白銀の髪を結いながら、結構重大な事をズケズケと言う。キシリアは本来大貴族の嫁へと出される筈だったのだが本人が強く（生半可なものではない）拒んだため縁談が成立せず両親が仕方が無くこの第六大隊に入隊させたのだった。キシリア自身も武道の道を行きたいと常々思っていたらしく入隊後瞬く間に団長の座に登りつめた。大貴族の嫁に成る筈だったその容姿は醜いはずがあるわけが無く誰も見惚れるほどの美貌がある。発展途上ながらもしなやかで豊満なその体に相成る夜空に浮かぶ銀系の如きその白髪は誰もが望みゆる。

団長に登りつめたただけあって剣術もそこそこに強い。

勝気な性格故なのか意中の人ができたことがないことに多少コンプレックスを抱いている。

部下には厳しい彼女だが密かなファンが急増していることは知る由も無い。

「食料、医薬品等の蔵数によると持って十日。ギリギリで町に着けるかという程度です」

「では、もっと節約・俟約を心がけるように伝令を出せば、多少は期間が延びるのではないですか？ その延びた期間を探索にまわせばいい事ですし」

ニコスが珍しく人の物言いに噛み付いていたことに少しデニスは驚いていた。

「それは無理です。例え節約・俟約を徹底しても医薬品だけではどうにもなりません。規定量をちゃんと投与しなければ無意味ですし、このまま進軍していると更に脱落者が増えるでしょうから。それに俟約令を出せばさらに士気が下がる事が考えられます」

「そう、ですか……」

ニコスの反論に事実を突きつけられ暫くの間沈黙が続いた。

「ふむ、万事休すとはこのことか。情けない」

一度最寄の町に帰還するというのは実質的にこの任務を放棄、もしくは失敗したということになる。

なぜならば、帰還の際にも脱落者は出る。脱落者達は一朝一夕では回復することが出来ないで、少数で奇跡に挑まなければならなくなる。その先にはどんな危険があるのか分からない、だからこそ大隊を率いてやって来たのだ。つまり少数で挑むことは敗北に等しいのだ。

まさかの役人様も自然の脅威に負けて帰ってきたという言い訳は聞きたくないだろう。

「選択肢は無いようですね」

どちらにせよ危険はあるのだ。  
ならば希望に賭けてみよう。  
そう決意したのだった。

話し合ったあの日から丁度十日経った。

蔵数管理を担う者の言ったとおり脱落者は更に増え続け食材も医薬品も底をつきかけている。

絶体絶命。

もう逃げ場は無かった。

最後の希望に賭けた。大隊の中で一番早駆けが上手い者を、リビユア峡谷が位置する筈の場所へと駆けさせていた。これで溪谷が見つかなければ再び無能の烙印が大隊に焼き付けられることになるだろう。

神に祈るしかなかった。



夕暮れ

闇が赤き空を侵食する光景はまさに絶景。  
常闇がやってくれば月明かりに照らし出され星を見上げるだろう。  
だが、星を見上げる時間にしてはまだ早い。

微かな希望に縋り付く姿は醜いだろうか。  
微かな希望に縋り付く姿は滑稽だろうか。  
微かな希望に縋り付く姿は不甲斐ないだろうか。

日は落ちる。

ゆっくり、ゆっくりと。次第に陽光も弱くなり薄暗くなる。  
誰しもが諦めた。  
もう駄目だ、と。

暗黒が空を覆い妖艶な月が顔を出す。

「おお神よ……！！！」

暗闇の中に一条の光が浮かぶ。

それは温かな橙色をした炎。

次第に聞こえてくる馬の蹄の音。

そして、

「ありましたああああ！！ 団長、キシリア団長！！ ありました  
！！ 溪谷です！！ リビュアです！！」

早駆けの蹄の音と騎手である男の叫び声。

待ち望んでいた全ての団員達には至福の音色と化したことだろう。

抱き合い、嗚咽し、涙する。

夜空に汚い、それでいて熱い音が流れるだろう。

今宵、リビュア溪谷にて男達の雄叫びが響く。

## 第一章陸記「進軍」（後書き）

やってることはあんまり大した事じゃないんだけどなと書いてて思った。

毎度の事ながら更新遅くてすいません。努力します。

さあ次はいよいよ主人公達との邂逅です。

一体全体どうなるのやら。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりはだか踊りを踊りだします。

## 第一章漆記「予期せぬ邂逅」

早朝の日射というものは憂鬱な心を捌けさせてくれる。

澄み切った空気もまだ冷たいが逆にそれが気持ち良いとも思えた。

清流流るるリビュア溪谷。

谷へと入るその入り口で仰々しい大軍団は束の間の休息を得ていた。

「ニコス、溪谷の深奥の様子はどうだった？」

「そうですねえ、何と言いましようか……まあ一言で言うത്秘境？ いやあ、ちよつと奥へ行っただけで周りが全く見えなくなつて、それに伴い日差しも木々の樹冠に遮られ差し込まないものですから、馬も怖がっちゃって注意して進めなければ危ない所でした。それに薄暗くて何か出るんじゃないかと思いましたがよ本当に。僕お化けとか苦手なんで勘弁して欲しかったです」

「お前の事など心底どうでもいいのだが、やはり森林の方を大群で行くには厳しいか……？」

「もう、少しは心配してくれたっていいじゃないですか。そんなん

だからこの歳になっても男が出来ないんですよ。」

「余計なお世話だあ！！！！ お前には関係の無い事だろうが！！  
聞かれた事に従順に答えるよ！！」

「もう連れはないなあ。でもそんな所がス・テ

」

騒々しい団長の断絶を飄々と受け流しながらふざけていたニコスだが、キシリアの般若と化した顔貌に恐れ戦きお茶目を中断せざるを得なかった。

「ま、まあ、おふざけはここまでにしときましようかねえ。そ、  
そつですねえ、やっぱりこの人数では無理があると思いますよ」

渓谷発見から五日が経っていた。  
食料も確保し、脱落していた団員達も次第に元気を取り戻している。  
ある程度の人員を確保できた事により渓谷の調査を決行したのだが、結果はニコスの報告通り。

「やはり河川を横切るしか先に行く方法は無いのか、困ったものだ

な」

隆起した巨大な崖に挟まれて存在するこのリビュア溪谷は森林がその大半を占め、人間の手出しなど一切受け入れないかのように出来ている。

森林には辛うじて人が通れるぐらいの広さの獣道はあるがそれもこの大人数では時間が掛かってしまう。

自ずとその他の方法で進まなければならないのだが生憎、他路には様々な障害があり結局は川を渡らなければならなくなった。

「河川は激流とそうでない所が有ったりしますので、川に沿って一度進軍し流れの比較的穏やかな地点で横断すればそこまでの危険性は無いと思いますがねえ」

「それでも、病み上がりの団員達にはきついものが無いかな？」

「それはもう自業自得というか、自分たちの体力の無さに悲観してもらわないとどうしようもありませんよ。こればかりは」

「そうは言ってもな……」

「早くしないと奇跡の場面に遭遇できないかもしれないですよ。これでも予定よりかなり遅れてるんですからもう形振り構わず進まない」と

ニコスの切言通り、自分達で規定した所定の期限は当の昔に過ぎ去っている。

それでも法王は明確な期限や期日などについては何も述べなかった。

ということは未だ奇跡は起きていないという可能性もあるのだ。

「選択肢が無いものな、良し。ではニコス、あの髭男もといデニス副団長を起こして来い。その後全小隊に伝令せよ。本日中に渡れそうな箇所を探し出し、明日の明朝には涉り切る。未だ体調が万全でない者は此処に置いて行くが、それ以外の者は準備を怠るな、と」

明朝、まだ日の昇りきらない朝露に濡れた溪谷を造る渺々（びょうびょう）たる大河を悠々と横断している一行があった。

轟々と激流の流れる大河ではあるがやはりその構造から流れが緩やかになる箇所は幾許かはどうしても存在しているのだ。その内のそれまた比較的浅い箇所を横断決行の場所と決意したのが昨日の晩、というよりはかは今日の丑三つ時。未だ疲れが見え隠れしている団員達もいるがニコスの言った通りもう形振り構っている場合ではない事は彼らも重々承知していた。だからこそ文句の一つも垂れずに黙々とされど漸進的に進んでいた。

「大分日が昇ってまいりましたな。キシリア団長」

「嗚呼、この遅さはどうにかならないものなのか？」

「ここまで従軍してきた疲労もありますし、如何に流れが緩やかだと言っても、足を掬われれば一巻の終わりになるやもしれぬのですから慎重にもなりますよ」

「むう」

「まあ、そう唸らんで下さい。直に涉り切りますから。もう少しの辛抱です」

デニスの言った通り、直に一边倒の団員は全て向こう岸に移動が完了し残るはキシリア、デニス、ニコスの三人となった。先達で、デニスがゆっくりと水に沈み行く。



背が他の者より低いらしく頭一つ出る出ないのギリギリの所で息苦しそうに進む。

そして、無事に涉り切った。

「大丈夫です！ 途中、突然現れる段差がありますので注意しながら御渉り下さい！」

次に渉るのはキシリア。

錘になる武具の類は既に向こう岸に涉っており、その身には護身の短刀と帷子のみを纏っていた。

「結構流れが速いのだな、気を抜いたら流されそうだ。これは前言撤回する必要があるな……」

デニスよりかは背が高いので息苦しいということは無かったが、予想以上に川の流れが強く思うように動けなかった。

「もう少しで段差がありますので、お気をつけてえええ」

号が飛ぶ。

気恥ずかしくなり、キシリアもそれに返すように叫んだ。

「分かってる！ 一々心配しなくてもいい！！ 私は大丈夫だから

「！！！！」

そう思っていた。

「何ッ！！」

そう、デニスが言っていた段差に差し掛かったのだ。  
両足を同時に。

そして、そのもう片方の足を『何か』に引き寄せられていた。

「ぐう、があああああああ！　ゴホッゴボッ！！」

気道に水が浸入し思った通りに呼吸が出来ない。

幾ら抵抗してもけつして足に絡みついた『何か』は離れない。  
段々と意識が遠退いていく。

水に浮く、心地いい感覚。

まるで赤子が羊水に包まれ育つ様な。

水中から見る陽光の差し込むその佳景を最後に。

意識は途絶えた。

網のように生い茂り蔓延る樹枝を足場とし、軽快に跳躍する一つの影があつた。

猿のようで猿ではない。

慣れた手つきで木々になる果実を雀り取り口に含みながら溪谷に流れる河川を目指している。

男は毎日の食料の確保の為に遠く離れた河川を往復することを新たな日課としていた。

竜、フェルニゲシュは必要最低限の活力を与えただけであつても世話をするとは言っていない。

始めは男もフェルニゲシュに頼ろうとしたのだが、頑なに拒否する姿を見て渋々自給自足の生活へと発展させた。

今ではそれも板についてきており、痩せ細っていた身体も筋肉が付き随分と逞しくなっていた。

「んはあーはあはああああ。ふん、ふんふー」

忌々しいあの偉丈夫が鼻歌として奏でていた何か。  
だが、それも慣れれば一つの娯楽として受け入れていた。

ある意味、この男は図太い神経と胆力を有しているのかもしれない。

「ひゃっほう」

長く伸びた蔓を器用に使い、華麗に回転しながら見事な着地に成功した。

自身も満足がいったらしく満面の笑みだ。

「今日は何が捕れるのかあ」

自作した籠を腰に提げ、ゆったりと川に近づく。

何時もは何の変哲も無いただの水面。

それがどうだろう。

目の前には何か得体の知れない物が流れていた。

「め、珍しい?!」

恐怖もあったがどうやら好奇心が打ち勝ってしまったようだ。  
恐る恐る川の中へと身体を沈めそれを掴んだ。

「お、重い……これ」

「一体何なんだ、これ？」

ズルズルと引き摺りながら水中から陸へとそれを上げ、木の枝で突いている。

「フェルニゲシュにでも聞けば分かりそうかな？」

そう呟くとそれを肩に担ぎ、再び軽々と枝々の間を跳んで行った。

「おおおおうう、おおおおう。キシリア様ああ……！」

溪谷に暑苦しい叫び声が反響したの言うまでもない。



## 第一章漆記「予期せぬ邂逅」（後書き）

一万アクセス突破致しました！

本当に有難うございます！！

感謝感激です！！！！

展開ですが、何かありきたりなような気もしないでもないような……  
まあ大丈夫だよね！？

次話ではついに主人公とキシリアが！

あ、あと感想受付を誰でも出来るようにしました。  
今後よろしくお願い致します。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりサンバを踊りだします。

## 第一章捌記「赤面」

目を覚ますとそこは小屋だった。

黴臭い。

幽暗な其処は、色彩というものが無く緑一色。

そんな部屋の中に不恰好な木の寝台が一つ。

その上に擦り切れた外套が敷物代わりに敷いてあるだけだった。

「ん、起きてたのか」

小屋の扉らしき部位を開け、淡い光を纏いながら侵入してきたのは一人の男。

その体軀は筋肉質でよく鍛え上げられているものだった。

肌の色は褐色に近く小麦色の肌と形容できる。

そしてなにより特筆する所は、

全裸だった。

「

ッー!!」

キシリアの声にならない悲鳴が森に響く。

歩きたびに揺れる《それ》にどうしても目が行くのだ。

羞恥を感じていないのだろうかあまりにも無防備すぎて恥ずかしくなってくる。



「何だ？　どうしたんだそんな顔して？」

キシリアは熟した林檎の様に顔を赤らめ、柄に似合わず女々しくもじもじとしていた。

第六大隊の団員が見れば絶句するか、一部のものは発狂しただろう。

「ぬ、う、あう、その、何か、何かで《それ》を隠して下さい！！」

鳴り響く金切り声は男に容赦無い傷を負わせれるほどに大きいものだった。

大分堪えたらしく耳を両手で押さえながら覚束無い（おぼつかない）足取りでキシリアに近づく。

「何で？」

普段、団員達の肉体を見慣れているものだから男性に対する羞恥心というものが多少薄れてはいたのだが、流石のキシリアも《それ》には耐性は無かったようで、恥ずかしげも無く徐々に近づいてくる《それ》に赤面しながらも目が釘付けとなっている。

「う、うえ？！　何でって言われても……その」

明確な返答ができず自暴自棄に陥りそうになるキシリア。

言いたくとも言葉に出来ない事はあるもので、今がそれであると彼女は回る頭で理解した。

「だから、何でわざわざ身動きをとり難くする格好をしなけりやんなないのって？」

「そ、それは、私が困るといっか、何といっか……」

「だから、何で？」

天然ほど怖いものは無い。

「困ると言ったら困るのです！ 女の前なのだから少しは恥を知りなさい！！」

「……仕方が無いな」

男はそう言つと小屋を出て行き暫くすると《それ》の位置する部分に大きな若葉を付け帰ってきた。

「これで文句は無い？」

「……はい」

未だ納得のいかなかったキシリアだが、これ以上言っても全く譲歩しそうな気配が無いので不承不承、本題に入ることにした。

「その、目が覚めたばかりで状況が掴めないのですが質問を二、三させてもらってもよろしいですか？」

「ん？ 嗚呼、問題ない」

「ではその、此処は一体何処ですか？ というか何でこんな所に？」

理解できないと言った風で、心底不思議そうな顔を晒している。

「川で流れてたんだ。珍しい物かと思って引き上げたんだけど……  
まあ違ったらしい」

残念だったと言わんばかりに首を振り落胆する様子を見せる男。

「珍しいって……」

この男は何か変だとキシリアは感じていた。

人の目の前に全裸で現れている時点でそれはもう分かっているのだが、人の事を馬鹿にしているというか同じものとして見ていないように思えるのだ。それはまるで動物や生い茂る木々を見つめるような眼差しだったり、同一の存在として見ているのではなくどちらかと言えば見下しているかのよう。

「それと、此処は自分で造った家だ。まあ自分で造ったと言ってもフェルニゲシュに手伝ってもらったんだけど。何でも自分でしななければいけないの、大変だね。ま、もう慣れたけど」

「手伝ってもらったって事は他にも？」

「そ、気が荒いってというか人間嫌いだけど」

男はそう言いながら首を上下左右に振っている。

首を振れば振るほど頭部から得体の知れないものが飛び出す。だれもが不潔だ、と嫌悪感が沸くだろう。

「あの、助けてもらってこう言うのはなんですが……臭いです」

先は気が動転していて気付くことが出来なかったが、この男、身体のおちこちに汚れが見られ腐臭が漂っている。さらに頭を振るものだから臭いも再び鼻孔に吸い込まれていく。

意識しはじめるともうどうしようもなかった。

「いつも大隊では気になりませんが我慢出来ません！！ 即刻、洗浄！！」

木の寝台から勢い良く起き上がり、怪我人とは思えない速さで男の手をとり半ば強引に外へと連れ出した。

河への道が分からず森の中を迷う羽目になったのは内緒。

## 第一章捌記「赤面」（後書き）

キシリアは極度の緊張や不測の事態が起きた場合は素の女言葉に戻ります。普段軍内部で使用している言葉は意識下の元で捻り出されているのです。

まあそんな事は置いといて、何と！ 初めての感想を頂きました！！  
純粹に嬉しいです。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりサルサを踊りだします。

今後ともよろしく願います。  
更新遅れた……

## 第一章玖記「忘却と願望」

美しい情景の表現の仕方というのは様々である。

奥深さがあり、それに同居するように壮大さや優雅さを際立たせているものだ。

だが、今、目前にあるこれはどうだろう。

素朴で簡素で何の変哲も無い森林。

されどもどこか懐かしい、望郷の念にかられるのだ。

木々の間をまるで生き物の如く枝葉を震わせながら流れ行く風。  
後ろ髪を靡かせながらこの野趣にあふれ風趣にとんだ景色を眺める女が一人。

「此処は……」

頬に伝う雫も何故そこにあるのか、キシリアには分からない。  
悲しくもない、嬉しくもない、悔しくもない。  
ただ、空虚な思いを馳せる。

「不思議なところだろう？ 此処は」

「此処に來ると嫌なことを忘れることが出来るんだ」



「思い出すのは一瞬。それでも苦しいものは苦しい。そんな記憶ならいないから」

「此处に来れば嫌なことを思い出す。だけでもそれも一瞬のこと」

「数瞬の後には何も覚えていない」

「何故自分は泣いているのか、何故自分はこんな気持ちなのか」

「分からなくなる」

「でも、気にはしない方が良い」

「それはそれで幸せなのだから」

男は語る。

強引に引き摺られてきた所為だろう。

男の股間にあるべき青々とした若葉が舞ってしまっていた。

「そんな状態で言われても何もこみ上げてきません」

そうキシリアは微笑しながら吐き捨てる。と再び何事もなかったように歩き出す。

歩き出した方向とは逆の方へと進んだ男はそこらへんに自生していた何かの樹木の葉を筆記取り悠長に股間へと巻いていた。

さらに森の奥へと突き進むキシリアだが、唐突にその歩みを止める。

男は不思議に思い傍に駆け寄るとその理由を把握した。

「まだ泣いているんだね」

そう言った男はキシリアに向ける表情を柔らかいものへと変える。キシリアの頬には絶えず雫が零れ落ちていた。

頬を伝い顎に溜り大粒の水滴となり落下するその様は傍から見れば男泣きをしているようにしか見えないだろう。

だが、彼女の脳裏には様々な思い出が蘇りそして消えることを繰り返している。

耐え難い苦しみが波のように押し寄せてくる筈だ。何が悲しいのか何に悲しいのか明確に分らないままに涙は零れ落ちる。

それを止める術は無い。

追想、追憶、追懐。

彼女が否定したい過去が消え去るまで忘却は止まらない。

「理解できない。訳が分かりません」

「頭が朦朧としてすごく気分が悪いです」

「でも、何故か心地いい。爽やかな、清々しい気分にもなります」

「何で、こんなことを見ず知らずの貴方に吐露しているのでしょうか」

「普通なら在りえないです」

「よく分からなくなってきました」

キシリアには此の場所は薬であって毒にも等しい。  
あまりにも多いのだ。

それは彼女が悲惨な人生を送ってきたからなのか。  
人には幸せと感じられる生き方を自身で否定し己を虐げているのか。

それは、本人にも未だ理解できない。

「行こう。このまま此処にいては駄目になる」

ゆつくりと青白くか細い手をとる。

汚れていても力強く大きくなった手が小さく繊細な手をそっと包む。

男は今まで進んでいた方向の逆へと引つ張ろうと腕に力を込めた。

「それに、河はあっちだしね」

男がキシリアに向けた恥じらいが無く屈託の無い笑顔は、彼が初めてみせた感情の表現だった。

広大な砂漠の中に孤立した楽園。

オアシスと言ってもいい。

そこは動植物が生活できる唯一の場所。

人の踏み入れたことのない場所は総じて神秘的で荘厳な景色であ

る。

では、美しくない景色はどうなのかと言えばそうでもない。  
美しいかどうかなんて人それぞれと言ってしまえば元も子もない  
が事実ではある。

少なくともキシリアは産まれてこの方目にしたことのない光景に  
感銘を受けていた。

「凄い……」

轟々と流れ落ちる滝に感嘆の声を上げるキシリア。  
河とは違う、また違った迫力を感じていた。

「あの水が流れ落ちている真下に行けば身体の汚れを落とせる。痛  
いから嫌いだけど」

男が指した場所は水流が止め処なく降り注ぐ場所。  
そんな所に裸で行けば痛いのは当たり前である。

「じゃ、行きましょう」

嫌だ、と首を横に振りながら立っている場所から動こうとしない  
男を無理矢理に滝壺へと押して行く。

水は冷たかったが一度入ってしまえば時間と共に慣れていき流れを感じるだけとなっていた。

未だに嫌だと踵を返そうとしている男。

「ええい、まどろっこしい」

キシリアは埒が明かないと、堪え切れずに男の身体をガツチリと掴み持ち上げる。

何事かという風な顔をした男が豪快に投げ飛ばされる様はそれはそれは面白いものだろう。

結局は強制的に水の中へと沈められることとなった。

「痛えええ痛ええよ！！」

身体に打ちつけられる水滴が与える痛みに悶えながらもその場に留まる男。

口では嫌だとは言っているが徐々に身体が痛み慣れてきたのだろう。

その証拠に少し後からは文句一つ言わず懸命に身体を撫で、キシリアと会話をしていたのだから。

「此処は、この渓谷は先ほどの様な不思議な場所がまだ存在しているのでしょうか。興味が出てきました。あのような所が他に在る

のかと思うと興奮します。」

「さあ？ 在ると思えば在るだろうし、無いと思えば無いだろう？」

「どういうことです？」

「思えばそれは現実になる。フェルニゲシュに教えてもらったんだ。見ようとしていないならそれは永遠に見えない、見ようという固い決意を持っていれば何れは見えるときが来るだろう。見えないということはそれは本気で見ようとしていないからかその時ではないからって。」

男は恥ずかしそうに頭を掻きながらも続けてこう言った。

「よく分かんなかったからどういうことか聞いてみたんだけど、フェルニゲシュ曰く根詰めて行動を起こせば大抵は成就するんだってことらしい」

「それとあの場所のような所が他に在るのかということと何の関係が？」

「んー。そんなに不思議な場所が見たいなら、頑張って探せばということを言いたかった」

「はあ……」

「まあでも、見たことの無い、御伽噺や伝承・神話みたいに語り継がれている世界は存在していると自分では思うんだ」

「此処から外の世界は何でも新しいしそれは想像や空想のものより何倍にも綺麗だけど、白昼夢に出てくるような不可思議な世界も楽しそうだとは思わない？」

「それに、そんな世界になればさっきの様な所が沢山在かもしれないじゃないか」

終始笑顔で語る男はまるで無邪気な子供。

恥ずかしげもなくそんな事を言う男にキシリアは苦笑しながらも温かい眼差しを送っていた。

「そうですね。そんな世界があれば私の望んだことも少しはやり易くなるんでしょうね」



轟々と鳴動する滝は汚れと共に何かを洗い流すように絶えず流れ落ちていた。

## 第一章玖記「忘却と願望」（後書き）

書いててよく分からなくなった。

次回には遂に第六大隊とフェルニゲシュ、そして二人との邂逅です。  
どうなることやら。（二回目）

ちなみに今回はキシリアの願望と主人公の思いがちらっと出てきました。

いつか詳しく書きたいなあ……。

あと、嫌な事を忘れると言っても一時的なもので、ふとした瞬間思い出します。それは凄く苦しいこと。そしてまた忘れなくなる。そんな感じのことを考えていました。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりルンバを踊りだします。

第一章拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」(前書き)

お気に入り登録数百件突破！

地べたを転げ回りながら悶え喜んでおります。

嬉しいです。今にでも昇天しそうです。

ありがとうございます！！

えー、序でに。キシリアの口調も安定しなくなって参りました。  
推敲したいです。

第一章拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」

絶望

絶望とは希望の無い様子を示す。

社会的地位の喪失。

信頼すべき相手の喪失。

裏切りなどに遭遇し、未来への希望を失ったとき  
人は絶望に陥る。

戦争などの極限状態では絶望が起こりやすい。

平時でも辛い経験に遭遇し、絶望することがあるだろう。

絶望している際は、ひどい孤独感

世界から孤立し社会的に見捨てられたような感覚に襲われる。

そう。

今

目の前には

絶望がある。

デニスには目前にある存在を許容することは甚だ難しいことだった。

この世界は悪と悲惨に満ちたものだという人生観。

世界は盲目的な意志によって動かされているとする思想。

そんな悲観主義的思考が止むことは無い。

眼前にあるのは御伽噺や童話の中で語られてきた架空上の存在。伝説の勇者がそれを倒し、皆を助ける。そんな物語は子供の頃からずっと懂れてきたお話の一つ。

火を吐いて、民に悪さをし、王を困らせる。

王は国の中で強い者を討伐に向わせたり、率先して討伐に行ったり、そんな夢のある話。

幾千のお話がある中で

竜

という存在は

孤高で

崇高で

至高である。

滋味に富む、滋味を物語に与える、無<sup>む</sup>謬<sup>びょう</sup>の香辛料。

そんな存在。

倒せば英雄。

そんな欲望もよぎる。

それでも、そんな感情を持てたのは刹那の間にしか過ぎず、睨ま  
れれば蛙のように縮こまるしかなかった。

『何事かと来てみれば……鬱陶しいな』

竜は口を開き呟く。

されど、それは、目の前の人間達には、ただの音。

『ふむ、奴は無事か？』

フェルニゲシュの言う奴とは諮らずとも分かること。

『ふ、何にせよ此処に人間が立ち入るのを見逃す訳にはいかん』

漆黒の竜は咆哮する。

轟く咆哮は雷鳴の如く大地を揺らす。

幾度も咆哮をし、突然翼を広げ、そして大空へと飛翔する。

『脅して追い返してやろうか……』

呟きは音となり風に運ばれ目の前の人間の耳へと入る。

竜の言葉を耳にした人は戦々競々（せんせんきょうきょう）とした表情をみせた。

それは、竜にとって悲しく、寂しく、そして醜いものでもあった。

巨大な体軀を羽ばたかせ大空を疾駆する化け物。  
流動たるその躍動は人の踏み入れる領域ではない。

ある一定部に線引きがされているかのようにそのある部分から先  
へと行くことが出来ないのだ。

否、出来ないのではない。しないのだ。

踏み入れば、死。

そんな予感が頭をよぎる。

それは竜に臆する心情がまるで絡みつくが如く足を留めさせてい  
る要因であるように、自身から発せられる恐怖の体現でもある。



それでも、それでもデニスは動かなければいけなかった。  
忠義に富み、信教を絶対とするこの男は、自身の忠義に値すると  
認めた軍の長を探し出すために奔走しなければならなかった。

信教の命に背いてでも。

それは此処にいる人間全員に言える事。  
厳格で峻厳ではある彼女を知っている者全てが口を揃えてこう言  
うだろう。

優しい御方だと。

「臆するな！！ 我々は誇り高き騎士であるぞ！！ これしきの事  
でへこたれてはならん！！」

鼓舞し、鼓吹する。

奮起した人は怒濤の進撃を始める。

駆ける足音と士気を高めるその怒声は竜の咆哮にも勝る。

「我等が長とするのは誰だ！！ その御方を見捨てるのか！！ 我  
等の一生の恩人である御方を！！」

怒声に混じり鼓舞するその言葉はこの場にいる騎士達にとって掛け替えの無いもの。

恩を忘れない為の。

「あの方がいなければ我々はこの場、いや、この世に生きてはいまい!!」

彼女が自身の身を挺してでも守った彼等。

今度は彼等が身を挺する番だ。

恩に報いる為にも。

「そんな御方を見捨てるなどは有り得る筈が無い!!」

宣言ともとれるそんな言葉を残しデニスは前方を見据える。

目と鼻の先にあるのは竜。

踏み入れてはならない線。

それを今、踏み越え驍進する。

「進軍せよ!!」

破竹の勢いで進む彼らの瞳には恐怖の色など映してはいない。

全裸で木々の間を舞う男の姿を見るキシリアの顔はまさに菩薩と言っている程に穏やかな顔である。

「流石に慣れてしまうんですね」

枝々に飛び移り器用に果実を採っているその所業は人間離れしているとキシリアは思った。

こんな所に住んでいるから出来るのか？ などとつい口を滑らしてしまいそうになる。

ある意味侮辱していることにもなりかねないのだから言葉とは難しいものだ、と再度認識し何度も頷いている時だった。

「あ」

落ちた。

盛大に頭から。

呆然としていたキシリアだったが直に我に返り、救出へと向う。

「大丈夫ですか！」

倒れている男の傍へと駆け寄り、丁寧に身体を起こす。

綺麗にした身体からは悪臭も発せられておらず、苦も無く介抱出来た。

介抱の途中、いくら見慣れているとはいえ、ちゃんと見たことが無い男の身体には目が行くもので気がついていないことを良しとして隔々まで凝視し始める。

「ふうむ、やはり私のような女と違って随分とガツシリして」

肩の三角筋辺りから、腕の上腕二頭筋など次第に下へと下がってくる。

眺めるだけでは我慢が出来なくなったのか、恐る恐る触り始めた。

「それでいてしなやかで良い身体をしているんですね」

遂には身体全体にまで及び始め、肩の後ろの部分にある僧帽筋から始まり前述した三角筋、上腕二頭筋に加え大胸筋や腹直筋、大殿筋、そして大腿筋など、全身くまなく撫で回したと言って過言ではないだろう。

触り終え、頬を上気させながらも気持ちいを落ち着けるために息を吐いた。

「べ、別に、疚しい事なんぞ思ってもいないし、ただ興味があつたと言っただけですし。」

自分に言い聞かせるように呟きながら再び何度も何度も頷くキシリア。

そして一言呟いた。

「それにしても、何で女の私よりこんな所でこんな生活を送っているこの男の方が肌が綺麗なんでしょうか……」

呟きは空しく響く。

「痛え……」

暫くして気がついたらしく、男は涙目になりながら頭をさすり起き上がった。

「調子に乗ってあんな事するからです」

「いや、違う。何か聞こえたんだ……」

「？」

「喚く様な、そんな感じ」

男は先ほどとは打って変わって神妙な顔つきをする。どうやら彼には聞き慣れない何かが聞こえたらしい。

「どうするんです？」

身体を洗ったら直にあの小屋に帰るという手筈になっていた。そこに、異変が起こった。

ならば、どうするということである。

危険なのか分からないまま近づくのもあまり薦められるものではないので、相談しようと暗に持ちかけたのだが……

「よし、行こう！」

「は？」

「ほら、行くよ？ 早くしないと！」

こいつは一体何を言っているのだ？ と言いたげな表情で睨むキラシアだったが力強く引つ張られ小さな抵抗も空しく空回りで終わってしまった。

大木の様に太く剣先の様に鋭い尾を叩きつけ、騎士達を薙ぎ倒す。巨大な大顎の威力は凄まじく、地面に埋まっていた岩石をも噛み砕く。

鋭く曲がつた大爪は騎士達の肉体を易々と引き裂いた。

「怯むなあああ！！ 進軍を続ける！！ 相手も徐々に疲れ始めている筈だ！！」

フェルニゲシュは苦い顔をしていた。

目の前にいる人間達を傷つけようとは思っていなかった。

尻尾を大きく振るった弾みで前衛を担う人間の一团を薙いでしまったのだ。

巨木をも倒す破壊力を持った蛮力を振るわれた人間達は激昂し、抵抗を強める。

抵抗を強めた人間達は槍や斧を手に取り目の前にある獲物を屠ろうと力を行使用する。

なし崩しに応戦しなければいけなくなってしまったのだ。

「進め！！ 怯むな！！ 臆するな！！ 我等にはあの方が必要なのだ！！」

馬鹿の一つ覚えの様に同じ様な事を幾度も喚き散らす。

だが、その鼓舞に応えんと騎士達の士気は上がり続ける。

それは、竜の咆哮をも掻き消すほどの大音声を張り上げるまでに大きな奔流を作り出した。

『嗚呼！ 鬱陶しい！！』



それでも、最上種である竜にとっては蟲の蠢きに値する程度のもの。

『焼き殺してやりたい!』

だが、怒りが頂点に達すれば幾ら温厚な者であろうと堪忍袋の緒が切れてしまうのはなにも人間だけではない。

そして、竜、フェルニゲシュにはその限界が訪れようとしていた。

竜の動きが静止し威圧的な眼光を送りながら大きく息を吸う。

吸引された空気が巻き起こす豪風の風声は清く美しい音色。

蛮声を上げていた人間達も呼応するかのように静まり返る。

緋色の瞳を目標を定める為に写る情景の細部まで眺める。

そして、一拍の後。

漆黒の大顎を盛大に広げ、火球を放った。

その火球は流星の如く騎士達に着弾し、弾け、砕け、爆ぜ、そして業火が全てを焼き尽くす。

直撃した騎士達はその形を留めぬまま、消し飛んだ。

「ああ、ああああ、あああああああつ」

直撃を間逃れた騎士ですら肉が爛れ、呼吸が出来ず、苦しみが  
ら息絶える。

爛れた肉を引き摺り、激痛に大地をのた打ち回るその情景は地獄  
絵図と化した。

「なんということだ……」

デニスは言葉を失っていた。

自分の指揮で仲間を率い、そして死なせた。

先導する者としては当たり前のこと。

だが、デニスは今まで一度も人を率いたことが無かった。

この、法王庁直属第六大隊に就く前にも傭兵紛いとして戦に出て  
いた事がある。

そう、第六大隊の唯一の戦の経験者なのである。

それでも、尖兵としてや歩兵として出撃したに過ぎない。

軍の先頭において、何度も生き残ったその手腕は賞賛に値するが、  
所詮は唯の雑兵である。

大群を率いて駒の様に扱う。

そんな冷徹で重厚な心など持ち合わせている筈が無かった。

「おお、おおお、おおおおお……」

単身、特攻した。

喚く様な

男はそう言った。

キシリアにはそんな声や音など聞こえなかった。聞こえていなかった。

それがどうだろう。

男が向う方向に共に駆け、目的の場所へと近づけば近づく度に声が、音が、大きくなる。

それは、まるで竜の咆哮のような地表を揺るがす巨大な爆音。

それに続いて轟く人の胴間声。

人の声には聞き覚えのある声が幾つもあつた。

何かが起こっている。

そう確信した。

「今向おうとしている場所で何が起こっているのか分かるのですか？」

遙か前方を疾走する男に向かって大声で問う。

「詳しい事は分からない！ でも、フェルニゲシュに何かあったのかもしれない」

男の口から出た言葉には聞き覚えがある。

フェルニゲシュ

もう一人いると考えられるこの男の仲間。  
だが、何故今この時にそいつが関係あるのかと疑問に思った。

「其処に貴方の知り合いがいる可能性があるのでですか？」

今、この男が向おうとしている、何かが起こっている地点に仲間がいるのかと問う。

其処に本当に仲間がいるのならば確かに急がなければならない。  
だが、其処にはキシリアの仲間もいるのかもしれないのだ。

「嗚呼、可能性じゃない。絶対にいる」

何に確信を得たのかは知る由も無いがその仲間を心配しているのはその表情から知ることが出来た。

「そうですか。実は私の仲間も其処にいるかもしれません」

「そう。だったらもうちょっと急ごうか」

キシリアは驚愕していた。

遙か前方にいたはずの男が何時の間にか目前へと移動していたのだ。

そして、束の間の浮遊感の後自分が抱えられていることに気づいた。

「ちょ、ちょっと！ 何するんですか！」

所謂、お姫様抱っこ。ではなく唯の抱っこである。

鼻先には男の顔があり息が掛かる。

恥ずかしい事この上なかった。

「抱えた方が早い」

男は、そう吐き捨てると先程の数倍の速さで木々の間を駆け、小川を飛び越える。

過ぎ去っていく景色の中でキシリアは懸命に男の身体にしがみついていた。

物凄い振動がキシリアの身体を今にでも落下させようと迫ってくるのだ。

恥じている場合ではなかった。

「見えた!!!」

森を抜ける。

森の中とは比べ物にならない量の光が目を焼いた。

だが、其処にあるべき情景は信じられないものだった。

大地には、黒ずみ煤と化した人の形をした何かが。

その先には血を流しながら死に物狂いで剣を振るう騎士達の姿。更にその前方には在るべき筈の無い存在。

竜

「フェルニゲシュ！」

今、自分を抱えているこの男は何に向って声を放った？

キシリアは愕然し絶句した。

この男の仲間とはあの化け物のことか？

この男は化け物の仲間？

あの化け物は一体？

疑問と不審。

嫌悪と忌避。

悪辣な思いが意思に反して込み上げる。

今直ぐにでも男から離れたかった。

「は、離せ！　今直ぐ離せえええ！！」

狂気が身を包み、身体を操る。  
支えられていた腕を跳ね除け、地面に降り、そして駆けた。  
仲間の下へ。

「?!」

男はキシリアの豹変に驚倒していた。

否

納得していた。

哀れむ様な、わびしむ様な。  
見下しているともとれる表情。  
それは、キシリアに見せた笑顔とは真逆。



「ああ、そうか。やっぱり人間ってあんな風なのか……」

落胆と哀愁と嫌悪を漂わせながら恐怖の表情を晒しながら自分から離れていくキシリアを眺めて、溢した。

「フェルニゲシュが言った通りじゃないか」

「何だ……期待するんじゃないかった」

明確な拒絶を示された空しさと、自分があんな【もの】と同等だと言ふ嫌悪が男の心を同時に襲う。

今、その人間と戦っている自身の友とも呼べる存在。

フェルニゲシュの下へと歩み寄る。

そして叫んだ。

「う ああああああああああああああああああああ  
ああああああ」

それは、竜の咆哮も、轟く大音声も、大地を流れる落ちる大流も、  
凌駕する。

声。

音色。

歌。

神々しく、禍々しい。

感情が溢れ、膨れ、また溢れ。

視認できる暗黒の光条の奔流が辺り一帯を竜巻の様に回転しながら  
包み込んだ。

『何が起こった？』

音を無くした世界に再び音がやって来た。  
再び漆黒の竜が沈黙を打ち破ったのだ。

黒い光が晴れ、確認はしたが周りには何の変化も無かった。

否

変化はあった。

それは

「竜、が……喋……った？」

愕然とした肉声は誰ともなく発せられたものだった。

## 第一章拾記「竜 咆哮 そして邂逅 自明するは男の天分」(後書き)

何だこの展開は?! と言う感じになっておりますがご了承下さい。当初、主人公の天分の顕現の描写を長々と書いていたのですが消し飛びまして、大分短くなつてしまいました。申し訳ない。閲覧者様の想像力に頼ることにします

えー所変わって、説明。

竜は現在その生息域を狭めています。

現在の人間の中で竜を見たことがある者はほぼいません  
フェルニゲシュに突き刺さる武器類は昔の物なのです。たぶん。  
そして大隊はキシリアにぞっこんというか、彼女を根幹としています。

彼等には彼女がいないと駄目なのです。たぶん。いろんな意味で。

この世界では 現時点での 魔法の類の能力は出てきません。  
たぶん。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりタンゴを踊りだします。

## 第一章拾巻記「帰還」(前書き)

場面が変わります。ご注意下さい  
スミマセン。

あと、地名とか国名とか、キャラ名とかには深くつっこまないでね  
！！

ネーミングセンスとか欠片も持っていないのですから。  
まあ、そこはご愛嬌ということに……

## 第一章拾巻記「帰還」

神

神の名前、名称世界各地で、人類が知能、文化を持つと同時にもったであろう概念であり信仰。一神教、多神教などの違いはあるが、なんらかの「神」「神聖な存在」への信仰、概念は多くの人々が持っている。

それは誰かが否定できる事でもない。

歴史的には自然崇拜や精霊、祖霊崇拜などから始まり、やがて都市文明や国家制度などができると神殿や神像、聖職者などが制度的に整えられた。また口承で伝えられた神話などが聖典として文書化されるようになる。

信仰されている民族宗教や、記録に残る古代宗教など数多くの神、神的精霊、概念が存在している。

無神論を唱える人々、無宗教という人々もいるが、「運」の良し悪しや哲学的概念、ジンクスのものを完全に排除できるわけではなく、また論理や科学的概念ですべてに必然性をもとめれば、「科学」の神化、科学信仰ともいえる。

なんらかの概念をよりどころにするとところに神的概念があり、信仰がある。

それは人間の思考と切り離すことは難しいだろう。

信仰、宗教というものはいつの時代でも人々の支えや心の拠り所であつたりと、様々な点で人間とは切っても切れない関係にある。だが、其れが原因で起こる紛争や戦争というものも必ず存在している。

物欲や慢心、信頼や信用ではなく、依存。

戦争と宗教というものは人間の醜き本性を体现しているのかもしれない。

## クロニウス

正式な名称はクロニウス神国。

寒流と暖流がぶつかる独特な地形を有しているクロニウスの海に周囲を囲まれている島国である。

が、その領土の広大さは周辺諸国の比ではない。



広大な大陸を一つ、そのまま領有していることと同義。

国民総数は数千万を超え、名実共に超大国の一員であることが証明された。

内陸部に位置する国では知り得る事の無い海洋の恐怖や、この地域にのみ頻繁に発生する地響きに悩まされながらも民は懸命に生きている。

その支えとして、ある時期に爆発的に広まった、この国を代表する、この国の根幹でもあるもの。

宗教。

明確な名称や肩書きなどは持ち合わせていないが民からは、セズ教と呼称されている。

呼称の由縁は幾説も提唱されてはいるが、最も支持を得ているのは誰が言い出したのか分かっていない俗説であり、なんでも、開祖の実名だ、神から承った戒名だと言うもので、自称知識人達が日夜両説について議論しているとかどうか……。

尤も、正規の（法王庁に登録されているという意味合い）聖職者達は現法王のミドルネームである『テユレ』からとってテユレ教と呼んでいる。これは現法王、基、法王庁も公認していることであり周辺諸国ではクロニウス神国のことを『テユレ』と省略・簡略化して呼称することも多い。

国の主君の位に位置する、統治者は言うまでも無く法王である。が、実際の統治をしているのは法王庁の総責任者である枢機卿だ。要するに共和制、共和主義なんてものの正反対に位置する神権政治に近いものを主体とする国家なのだ。

だが、他の専制政治国家とは違い国民からの不満はそれほど見られない。

貴族制、貴族主義を掲げる国特有の身分差別や侮蔑意識がそれほどまでに蔓延っていないということがその要因の一つになっていると考えられている。

故に民衆は、島（大陸といっても過言ではない）の開拓事業等に

は協力的で広大な土地の彼方此方に村が造られ、それを基盤として大きな都市が出来上がった。

そんな幾つも点在している都市の中で、最も大きく、そして広大な都市であるこの国の首都ラパスでは、現在、街中が仰々しい飾り付けで覆われ何かが行われようとしている。

「あの、一つお尋ねしてもよろしいですか？」

街路を忙<sup>せわ</sup>しなく往復している住人に遠い町から遙々とやって来た唯の放浪者が、街の現状に疑問を呈していた。

「一体何が行われようとしているんですか？」

「ああ、っ？ 俺は今忙しいんだ！ おめえに付き合ってる暇なんざ無えってことが見て分からのか！」

放浪者は手酷くあしらわれた事に膝を折りそうになるが、次があると楽天的に捉え、めげる事無く挑戦する。

「あのーすいません」

「あん？ あー、後々」

新たに捉まえた住人に再度疑問を呈したのだが、一瞥しそして呆れられ結局は峻拒される。

「あ、あのー」

「？」

「お尋ねしたい事が……」

「……知らん」

「今、明らかに顔を見て判別したでしょ！？」

冷た過ぎる眼差しに耐えながら、住人達を追いかけるように何度も街中を往復していた。

幾度と無く突貫した放浪者だったが、親切に現状について享受を垂れてくれる人が見つかったのは両手の指では数え切れない人数になっただった。

「今、この街では先祖の霊を慰める祭祀が行われているんだ。他国では厳かに沈痛な面持ちで、黙祷なんて行為をする所もあるらしいがうちは違っていてね、なんていうか、こう、もっとパアツとやろうぜ！　みたいな気質の人が多いんだよ。私もこの国に移住してきて驚いたが、そう悪いもんでもないよ。辛気臭くなるのも嫌だしちようどいいさ」

おっさんが移住してきた他国人だったという本当にどうでもいい情報と共にこの街で何が行われようとしているのかを知った放浪者だったが、自身の目的の為に、どうしても知りたいことがあった。

「あの、もう一つお尋ねしてもいいですか？」

「あ、ああ。問題無いよ」

突然真面目な顔付きに豹変した放浪者に多少辟易しながらも懇切丁寧な受け答えをしてくれるおっさんは、聖人君子と言ってもいいのではないだろうか。

「ついこの間、この首都から出立した第六大隊が近日帰還するとの噂を耳にしたのですが……」

「ん？　第六大隊？　ん？　……ああ！　あの役立たず

共かい」

善良なおっさんから出てきた言葉は、あの隊と只ならぬ（……  
）関係を持っている放浪者にとっては信じ難いものだった。

「え、ええ」

だが、一々反論していても埒が明かない。というより、目の前にいる親切なおっさんはこの放浪者が隊に関与しているなんて事は知る由も無いので致し方ないことではある。

なんとか苦言を飲み込みながらも曖昧な相槌を打つ。

「いやあ、あの能無し共が法王様の勅命を承ったと聞いた時には天地が引つ繰り返るかと思つたもんだよ。後から聞いた話によるとお役人様も渋々了承したつてらしいじゃないかい。大丈夫なのかねえと思つてたんだよ！それがどうだい？何でも無事勅命を全うしたぞうだ！これで誰も無能隊などとは言えなくなつたなあと感慨深くも思つてたんだが」

次第に唯の愚痴や世間話に転化していき耳が痛くなってくる。  
早々に次の話題へと移ろうと催促の為にわざとらしく咳き込む。

「ゴホンッ！　ッゴホッゴホッ……ウッ……オエッ」

「おいおい、大丈夫かよ」

「……死ぬかと思った」

手違いで大きく吸引しすぎた為、気管に異物が入り込んでしまったようだ。

だが、おっさんの無駄話を中断することが出来たので面目躍如というところか。

「えー、気を取り直して。その第六大隊の帰還する日付などは耳にしていますか？」

これこそが放浪者の真意。

「あーっと、何時だったかな？ ……そうそう！ 今日だよ今日！ 祭祀の日と重なるなんて、なんと言う幸運！ そいつらの帰還も相まって今年の祭祀は盛大なものになるだろうなあ！！」

上機嫌に去っていったおっさんを後にして、放浪者は都市の中心部に位置する大広場へと足を進めた。

首都ラパスには法王庁の本部であることを象徴する旗印が掲げら

れた建物が幾つも存在している。

彩り豊かな煉瓦調の建物や豪華な装飾が施された塔等をイメージしがちだが、実際はそうではなく木造で彩の『い』の字も無い、茶一色のなんとも質素な空間である。（勿論、聖職者達の住まいは別である）

だが、建造物に法王庁の紋様が焼印のように象られ外壁の一部と化している情景を見るに、この街がセズ教（テュレ教）の総本山であることを表している。

そんな街の中心部となれば、そこにある建造物は旗印一色に染め上げられていつというのは当然のことなのかもしれないが。

本来、正規に登録された聖職者達か、其れ相応の地位や権力を持った人物で無ければ足を踏み入れることなど出来ない筈の場所に易々と侵入出来たのは、現在行われている祭祀の影響だろう。

毎年なんらかの行事がある度に一般開放されているのだが、そんなことを知っている筈の無い放浪者はけげんな表情で周りを見回していた。

（おかしいなあ？ 警備とかもつと嚴重だつて聞いてたんだけど……）

決して口には出さないが、表情には出てしまっている為、何故中央広場が開放されているのかという事情を知っている民衆からは白い目で見られている。

そんな風に見られているなどは夢にも思っていないのだから、不可思議な目線に対し、けげんな表情を深めていった。

太陽が頭上に昇りきった頃、街中から独特な音色を放つ笛の音が響く。

その音色は何処か懐かしいものであったり、沈み込んだ気分を陽気にしてくれる様な、今にでも踊りだしたくなる。そんな温かい音色。

民衆のはしぎ様は凄まじいもので、何処へ行っても公道の脇には、伝統的な衣装で着飾り調子良く笛を吹き鳴らしている光景がある。

酷い所では道のだ真ん中に出しゃばって来て、踊り始める始末。

お世辞にも綺麗とは言い難い舞踊や音楽だが、これが市井の人々の楽しみ方だと樂觀的に受け止める権力者達。

様々な構図が生まれ、許容する。許容できる雰囲気都市全体に広がっていた。



そんな中、街の出入り口でもある正門を潜る異様な一団が現れる。

正門を潜る者を監視し、門を守護する役割を担っている衛兵達は言葉を失っていた。

第六大隊の帰還は随分と前から噂されていた為、何時かはこの門を通るだろうと予見はしていた。

だが、目前を通り過ぎてゆく一団は衛兵達の想像を遥かに超えた様相で帰還を成しているのだ。

衛兵達は彼等、第六大隊がどう呼称されているのかを知っている。お坊ちやま軍団、役立たず、能無し。

確かに一度も正式な戦に発ったことも無い、貴族の子息達を貶す意味も持っているだろう。

衛兵達も少なからず、この隊を罵倒したことがあった。

だが、それは真意からではなく、仕事の癪癢や焦躁をぶつけただけである。

鬱憤晴らし、とも言い換えられる。

心から憎い訳でもなく、心から疎んでいる訳でもない。

だからこそ、法王の勅命を全うしたという報告を耳にした時には素直に感心していた。

素直に祝福しようと思っていた。

それが、どうだろうか。

眼前に映る異様な一団を見て、縮こまってしまっている。

祝福の言葉を、祝辞を、祝砲を、忘れ、固まっている。

差し出そうとした腕を、手を、指を、まるで汚物にでも触りそうになったと避ける様に引っ込める。

普通なら、常時なら、いつもなら。

其の行いを見た者は衛兵達を罵っただろう。

誹謗しただろう。

痛罵を浴びせただろう。

冷罵を浴びせただろう。

漫罵を浴びせただろう。

嘲罵の的としただろう。

悪罵しただろう。

だが、今は、誰も、何も、言わない。

言えない。

帰還した騎士達は、幾分か数を減らしていた。

傷付き、疲労していた。

そして、服を、正装を、濡らしていた。

赤く、紅く、血塗られて。

表情は見えない。

ある者は衣服を裂いて顔に巻きつけ、ある者は仮面の様な者を被っている。

覗き見えるのは眼光のみ。

それは酷く濁っていて、虚ろ。

騎士達全員が門を潜ったろう。  
衛兵達は閉門しようとした。  
ふと、騎士達がやって来た方向を一人の兵士が眺める。

「お、おい……あ、あれ、見ろよ」

一人の呟きに他の兵士が殺到し皆が一樣に同じ方向を見つめる。  
肉眼に捉えたのは大きな点。  
否、点ではない。

それは、誰もが知っていて、誰もが恐れる、誰もが敬う絶対的存在。

それが、まるで唯の大きな荷物の様に、荷車に縄で巻きつけられ運ばれていた。

それは、眠っているかのように静かに瞳を閉じている。  
その後方には、同じように荷車で運ばれる檻のような物が衣で覆い同様に縄で固定されている。

檻からは動物の呻き声が絶えず鳴り響く。

唐突に烈風が凪ぐ。

檻を覆っていた衣が呆気無く飛んでいった。

檻に捕らえられていたのは、人。

褐色の肌に伸びきった白銀の髪。

その瞳は美しく妖艶に瞬く紫紺の彩。

そして全裸。

体中を鎖で固定され、身動き一つとれない状況。

鎖は手や足の拘束具に連結されている。

そして、その首には大きく、そして厳つい銀の首輪。

「

」

男の雄叫びは、竜の咆哮のように眺める人々を竦めさせた。

日射が反射し、白銀の髪と銀の首輪が同時に煌めく。

「なん、だ……あ、れ？」

当初の目的を完全に忘れ、祝い事に興じていた放浪者は、街の中を跋扈している異様に対し、順当な反応を見せた。

## 第一章拾巻記「帰還」(後書き)

えーと、フェルニゲシュと主人公とキシリア達の不可思議な場面はもうちょっと後に書きます。

どういうことが起こったのかは次話でちょびつとだけ説明？みたいなのが入ります。たぶん。

追記：

気づいたけど、初めて主人公の描写を書いたような……。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりタップ・ダンスを踊りだします。

## 第一章終記「報告……そして

」（前書き）

一章が終了いたします。

放置している複線（？）はまあ、後々拾うとして、投げ槍感がいいなめないですがこんな感じで続きます。

## 第一章終記「報告……そして」

「なんだってんだよ畜生……」

放浪者は愚痴を吐く。

愚痴と言っているのかは分からないが、苦言が漏れたのは確かである。

通り過ぎていった異様な一団に対しての、だ。

放浪者はある人物に会いに来ていた。

その人物を見かけたのだ、あの一団の中に。

其の人物が、他の騎士達と同様に虚ろな目をしていたのを見て、心苦しくなった。

前に見たあの人はもつと希望を宿した瞳をしていた。

力強く煌く目をしていた。

後ろに引き連れている竜の存在も気になるが、兎に角何があったのか一刻も早く、直接本人から聞き出したかった。

だが、放浪者の願いも空しく、中央広場の更に奥。

本当に関係者しか立ち入ることの出来ない、法王庁の本部へと消えていった。



大きな荷物を連れて。

「さて、新任議決など以外にこの場所で議会を開いたのは初めてだよ。ま、そんな訳で我々を納得させる様な、詳しい話を聞きたいね」

キシリアが目の前にしているのは、実質この国の支配者である枢機卿。

見掛け、口調と共に仰々しくないうら若きこの男は外見に反して齡六十を超える妙齡だ。

本来は正装での出席が義務付けられている筈だが、此度は軽い格好での御出席である。

尋問が行われようとしているのこの場所は、誰しもが一度は目にしたことがあるであろう大審問場。

大審問場では聖職者の選任や国務長官の引継ぎ儀式、枢機卿の選任と不信任の決議などが総じて行われる。

議会が開かれる時には国内全土から権威を持った貴族や聖職者達が挙って参加（強制的に）するので、かなりの広さを要するのだが、この大審問場は螺旋を描く塔のように高く、円に沿って座席が並べ立てられ大人数を優に収容することが可能だろう。

中央にはポツンと一つの椅子が置かれている。

それは、常時ならば次期枢機卿や聖職者が座する物。

だが、今は常時ではない。

大審問場が使用されているということは、国内全土から貴族や聖職者達が収集され此の場にいるということ。

何百という威厳ある眼差しにキシリアは卒倒しそうだった。

自分のには縁の無い場所だと思っていた。

だが、現実には今、此の場所に座している。

「わ、我々第六大隊は法王陛下の勅命を受け、首都ラパスを出立し南方に足を進めました。皆様方も御存知の様に陛下はリビュア渓谷にて奇跡の顕現を瞳に収めよとの命をお出でになりましたので南方するのは当然のことでございます」

キシリアの口調はゆっくりしていたが、何処か急いでいる風に感じられる。

「南方するにあたって、ルドン、ベルモ、アンダस्ता、ギエンダ  
ルンで大隊の食料や医療品の確保と休養をとりました。リビュア渓  
谷には砂漠を越えていかなければいけないので、事前の準備には余  
念を欠かさないよう努力してきました」

「……監査兵を呼べ」

枢機卿が呼出したのは第六大隊に砂漠越え直前まで付いてきていた私兵の事だ。

何分、戦の経験もない隊に何もしないでおくのは些か心配だったのだろう。

リビュア溪谷までの道のりに同行する筈だったが、砂漠越え直前の町で腹痛に苦しめられ同行を断念したというなんとも情けない実情があった。

「今し方言った事に偽りは無いな？」

監査兵を宛がったのは予定外の行動を起こさないようにする為の抑止力。

の筈だったのだが、先刻通り、腹痛でその役目を全うできなかったという尻目があるのだろう。

枢機卿の横に立った男から発せられた声は小さく聞き取り辛い。

「は、はい。確かに第六大隊はルドン、ベルモ、アンダルスタ、ギエンダルンで休息と補給を行いました。何の間違いも御座いませんです。その、砂漠越えの後に關しては存じ上げて御座いません」

「ふむ、貴公が同行の途中に急激な腹痛に見舞われ監視の続行が不可能だったということは聞いている。砂漠越えまでの道のりに關してのみ君の報告を採用させてもらつよ」

情け無用と言わんばかりに監査兵の傷口に止めを刺したようだ。  
虫の息になった彼はすくすく審問場を後にした。

「ここからが重要だ。砂漠越え後貴公達に何があったのか。事細かに知りたい。特に『あの』荷物は何なのだね？」

あの、とは言わずもがな、巨大な荷物のこと。

「……………ギエンダルン出立の後、補給物資が底をつきかけました。砂漠越えの最中でしたので帰還が可能な最低限の物資は残しておかなければいけなかったのです。帰還するカリビュア溪谷まで突き進むかのどちらか一択。我々は最後の賭けを致しました。隊内で一番早駆けが上手い者を使い朝の内に出立させ、夜までにリビュア溪谷を見つけ戻ることが出来たならこのまま突き進む、もし戻ってこれなかったら帰還を待ち諦めてギエンダルンに退去するという賭けです。」

どうなったのだね？

何処からか、疑問が呈された。キシリアの話にのめり込んだ一貴族の誰かだろう。

もしかしたら第六大隊の退役者かもしれない。

夢見る御仁には冒険譚はまさに嗜好の富む話だろうから。

「賭けは見事に成功しました」

疑問に答えるように、キシリアは巧みに応えた。  
威圧にも慣れてきたのだろう。

「諦めようと、皆で頂垂れていた時でありました。暗闇の中から馬の駆ける音と共に一条の光が我々の目の前に現れたのです。それは、早駆けを頼んだ騎士の松明の火で御座いました。そして我々は歓喜し翌朝、意気揚々とリビュア溪谷へ向いました」

「リビュア溪谷は未だ嘗て人が踏み入れたことの無い場所でしたから、人の手が加えられておらず、自生している木々や大地を轟々と流れる巨大な河川、雄大な景色が我々を出迎えてくれました」

「凄く綺麗で凄く壮大で心が洗われるようでした」

「入り口で立ち往生する訳にもいきませんので、兵士達を待機組と探索組に二分化しリビュア溪谷の探索を開始致しました。ですが、最初に立ちはだかったのは足の踏み場も無い森林です。二分化したとは言っても我々は大隊ですから相応の数がありましたので森を突き抜けるには無理がありました。人が辛うじて通ることの出来る獣道でしたので本当に無理をすれば進むことは出来たのですが、その分効率が悪くなるだろうと危惧しましたので最終的には流れる河川

を横切るといふ行為を実行致しました」

「その、時にですね……あの、」

突然しどろもどろになるキシリア。

自分の失態は誰でも知られたくは無いものだ。

ましてや、自分の口からなど以ての外。

「注意を怠った自分が河川を横切る途中に足を滑らしてしまい、その……暫くの間、意識が無かったのです。覚醒した時には大分川下の方に流されていたらしく、目の前には褐色の肌をした男がいました。」

「褐色肌の男とは、先ほど牢獄へ収容したあの男のことかね？」

声を発したのはまたしても枢機卿ではない。

枢機卿に対面する位置に座している一人の男が、キシリアをまるで射殺そうとしているかのように鋭い眼差しを向けている。

身に纏っているのは貴族の証である真紅の外套。

外套の真紅に呼応する蒼き輝きを持つ頭髮は随分と後退していた。

「その、通り、です。お父様……あ、いえ、アディンセル様」

アディンセル。

クロニウス国内では名を知らぬ者はいない。

国家の立役者である大貴族の内の一貴族。

貴族の中の貴族である。

キシリアの家名でもある。

「奴を収容する際に負傷者が何名か出た。あんな野蛮な男に何かされなかったのかねキシリア？」

父であるヴァンガードとの仲は最悪である。

キシリアは幾つもの婚約話を蹴ってきたのだから、面目を潰された父が怒らない筈も無く、大変険悪な状況にある。

今言った言葉も表向きにはさも心配しているかのように聞こえるが、皮肉っているだけ。

自分の事をラストネームで呼ばせている事からも分かるとおり、救いようが無いほどに仲が悪いのだ。

「自分は彼に救われたのです。野蛮という部分も否定はできませんが、意識の無い自分を介抱してくれていたようです」

「話を戻しますが、介抱され意識を取り戻した自分は、突然聞こえてきた怒声に驚きその方角へと駆けました。すると、仲間が、仲間達がおぞましい怪物と剣を交えていたのです。」

「怪物とはあの大荷物のことだね」

枢機卿に問われ返答する。

「はい」

「あれは見るからに伝承や御伽噺で語られた『竜』そのものだ。あれは本当に竜なのか？」

「はい」

「根拠は？」

「我々はその竜が火を吐き仲間を焼き尽くす光景を目の当たりにしました」

問いに対して答えるその声は震えている。

「人語を理解していました」

「そして、伝承にあるように仲間達を襲っていたのです」



「では、聞くが君達第六大隊は戦の経験も無い、ハッキリ言って烏合の衆となんら変わらない。それが、どうして、竜を仕留めることが出来たというのだね？」

枢機卿の疑問は尤もな疑点である。

幾ら訓練をしているからと言っても実践の経験が無いのであれば使い物にはならない。

「あれは、唐突に起こった出来事です。自分も気が動転していてあまり鮮明には覚えてはいないのです」

「それでもかまわないのであれば……」

「問題ない」

「では……我々第六大隊に所属しているニコスⅡレイディが颯爽と現れ竜に一撃を入れたのです」

ほお

という感嘆が周囲から漏れる。

「たった一撃であの巨体が倒れる筈も無いだろう？　その後はどうなったのだ？」

雰囲気をぶち壊し、容赦無い疑問をまたしてもぶつける枢機卿。  
少しだけ、鼻息が荒くなっていると感じているのは対面している  
キシリアだけだろうか？

「枢機卿は竜の御伽噺や伝承を一度は耳にしたことがありでしょう。御伽噺では、勇敢な騎士が竜を倒します。そしてそのお話には大抵、伝承から伝わる竜の弱点が存在していてその弱点を見事についで終焉を迎える」

「その時の彼は、さながら伝説の英雄のような佇まいでした」

「偶然か（・・・）必然か（・・・）は分かりません。ですが竜の弱点である鱗の無い部分を突くことが出来たのです」

「竜を仕留めたということか……」

「はい。ですが、厳密に言えば竜は死んではいません（・・・）」

キシリアが今のいままで、報告してきたことは事実であり、真実ではない。

竜が火を吐いたことも。

人語を理解した（・・・）ことも。

仲間を襲ったことも。

全て事実

だが、真実ではないのだ。

「どついつことだ？」

「死んではいません。が、生きているとも言えないの状態なのです」

「目を覚ますことが無いのです。何をしても」

「竜の存在自体が法王様が仰られたように奇跡なのかもしれません。ですが今の状態も奇跡に近い」

真実を隠すことは彼に（・・・）対する贖い。

拒絶を示し大切な存在を失わせてしまったことに対する贖罪。

「何をされても起きることが無い（・・・）のですから  
」

これはある方法をみつけるまでの時間稼ぎ。

「軍事、外交、等に最大限に利用してみてはというのが我々からの提案です」

「幸い、竜の回復力は凄まじいものです。ある程度傷つけることも可能です」

多少意固地になつてでも男を庇い、姑息な手段を用いても竜を生かさなければならぬ理由。

それは

竜を目覚めさせる) . . . . . (方法を見出し、男に贖う為の  
時間稼ぎ。

贖いの旅、償いの戦いが始まる。

第一章終記「報告……そして

」（後書き）

旅ってというか戦争ってというか……

こんなの一回やってみたかったんだ……

今後に乞うご期待！！

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまり阿波踊りを踊りだします。

## 第二章巻記「懇願」（前書き）

小説家になろう 勝手にランキングに参加致しました！！  
押してね！！（強制）

こんなランキングがあるとは……

知らなかった……（本当）

あと、今回はすごく短いです。  
すみません。



## 第二章巻記「懇願」

男が目を覚ますとそこは牢獄だった。

手足を鎖で縛られ、銀の首輪が施錠されていた。

黴臭い。

泥糞の臭いと人肉の腐敗臭が混ざった悪臭が鼻腔を衝く。

「臭い」

唯一の記憶の中にある、あの黒岩の監獄を思い出す。

だが、あそこもこの悪臭漂う牢獄ほど臭くはなかった筈だ。

「暑い」

蒸し暑い。

感じたことの無い暑苦しさを体感し再び苦言を洩らす。

「痛い」

疼痛。

褐色の肌に覚えの無い傷跡が無数に残っている。

無言が続き、静寂が世界を支配する。

男は、まだ臆げの意識を徐々に覚醒させていく。

そして、小さく、微かに、叫喚する。

「フェルニゲシュ」

男の瞳には涙が溜まり、大粒の雫となって零れ落ちる。

「フェルニゲシュ」

呼ぶように。

「フェルニゲシュ」

居場所を確かめるように。

檻の隣で牧草を食んでいた馬が、突然嘶いた。  
黄昏る空の色が、幽暗な牢獄に侵食する。

橙黄色の光が暗黒を払拭し、彩りの無かった獄中に鮮やかな色が宿る。

射光の源は大きく開かれた扉の向こう。  
そこに一つの影があった。

ふう

大きく深呼吸をしたのだろう。  
吐息が聞こえるほどに吸って吐いてを繰り返した。

「来るな！」

男は逆光の中でその影を認識していた。  
そして、明確な拒絶を示す。

「来るな！」

忌避を示しても、どんなに大きく喚いても影の主は近づくことを止めない。

少しずつ、少しずつ、僅かにだが、歩み寄る。  
それは、怖々ともとれるし堂々ともとれる。  
表情は逆光で読めない。

「そう、悲観しないで下さい」

顔が見える見えないの瀬戸際で、影は立ち止まり会話をする。

「貴方にとって得がたい存在は未だ生きています」

声は震え、どこか哀しい響きを持つ。

「ですが、今のままではそう遠くない内に、本当に（・・・）無くなってしまうです」

だが、覚悟を持った、そんな声音。

「そこで、貴方に一つお願いをしたいのです」

これは、男に対する唯一の懇願。

「我々の手助けをしてくれませんか？」

たとえ罵られようとも、たとえ憎まれようとも、贖いと償いの為に。

黄昏の色光に照らされた牢獄は、夕闇の空を象徴しているかのようだった。

## 第二章巻記「懇願」（後書き）

各々のサブタイトルが思いつかない……

どうしよう……

次回は反動で長くなるかも（ここ強調）しれません。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりコサックダンスを踊りだします。

## 第二章武記「酒、酒、酒えー！」（前書き）

都の説明とか……。何があつたかとか……。ニコスとデニスと放浪者の邂逅など色々説明の回。

思つてた以上に長くならなかつた……。（というよりか二話に分けた）

すいません。あと、ニコスとデニスはかなり酔ってます。

更新遅れてほんつとすいません。ほんと。

あ、ちなみに貴族の居住といつても仮住まいみたいなものです。はい。

## 第二章武記「酒、酒、酒え！！」

首都ラパスは特徴的な地形の上に成り立っている。

小高い丘、と言えばそれで終いだが、丘は丘であっても山にも等しい高さを誇る。

だが、あくまでも名称としては丘であるとされている。

傾斜はとても緩やかで建造物の立地や生活に支障はきたさないが、緩やかであるのに比例してその頂点へと登る道はとてつもなく長くなる。

それが、首都ラパスがクロニウスの中で広大とされる所以なのだが……

セズ教の総本山でもある法王庁がこの丘の中心　頂上に位置する為、参拝や訪問の際に多大な疲労を被ることとなる。

現に、先日帰還した第六大隊ですら緩やかではあるが途方も無く長い坂道に疲労の色を隠すことが出来ていなかった。

大荷物を引いてきた軍馬やそれを補助する兵士達は、疲労の末卒倒というどうしようもない状態に陥ってしまうほど。

こんな、お世辞にも良いとは言えない場所に町を設けようとした意図はいくつかあるのだが、それも時の経過と共に薄れていった。今では民衆の愚痴に必ずといっていいほどまでに話題にされている。

確かに、商いの為に日に何度も往復しなければいけない、なんて人もいるのだ。

お小言にされるのも仕方が無いと言えば仕方が無いことなのだ。



特徴的なのは何もその立地している土地だけではない。

町や村、ましてや都となれば匪賊や賊徒に対する（要するに敵）防護策や設備等は常備しているものである。

ラパスも例外ではなく、丘の麓に巨大な城壁と唯一の門口である大門により外敵からの防護は万全。

さらには、城壁の内側にも幾つかの区域分けが施されており、区域の区切りの度に巨大な城壁と大門が建設されている。

現在では総計、第三区域まで区画化され、新たな区画増設の為に四つ目の巨大な城壁と大門が建設されている最中だ。

その区域ごとに入ったり入域、住居の転居などが出来る地位というものが限定されてはいるが、絶対とまではいかないのが現状である。

仮に区域ごとに区切るとしたら

第一区域には一般の民衆。特別な職や家に就いている訳でない、所謂、平民と呼ばれる人々の居住区域。

第二区域には聖職者や下位に位置する貴族（男爵、準男爵）の居住区域。

第三区域には上位に位置する貴族（伯爵、辺境伯、侯爵）と法王庁の立つる居住区域。

と、なる。

現在進行している第四区域には法王庁と法王の住まいである宮殿が入る予定であり、完全に他と隔てる目的で建造が進んでいる。

外界からの完全なる遮断により、法王や法王庁の神格化に拍車をかけることが多面的にある一部の目的であるのだろうが、今以上に

情報や現状の把握が困難になる可能性も否めない。

結果としては外敵が国内にほばいない現状だから問題は無いということになる。

ある意味脆いと言ってしまえばそれまで、だが、神格化させなければいけない理由というのも存在しているのだ。

そんな、いざこざや問題が奮起しそうでしない不安定な状況に、法王の不可思議なお告げと、巨大な荷物を背負い込んで来た第六大隊に役人達は東奔西走している。

一方、その当事者でもある一部の人間は、案外のんびりと酒を煽っていた。

「いや、本当に息が詰まって死にそうになりましたよ。あんな所に二度と呼び出されたくないです。初めて入った審問場は予想外にでかいし、周りにいた顔ぶれなんて想像もしたくないほど大きな権威と権限を持つてる人ばかりじゃないですか。僕なんて枢機卿とアインセル様の二人に睨まれたんですからね……あん時はもう駄目だと思いましたから　　ってもう！　うるさいなあ！」

第一区域にある人気のある酒屋で豪快に酒を煽る髭面の男と狐顔の男。

木造の机の盤上には酒の入った杯と焼き焦がした魚が蒸気を上げて美味そうな音を奏でている。

体型や客観的にみた性格でも、いかにも相反するような様相である二人が酒を交わしていることに、周りの客は少なからず疑問を持

つていたが、酒の席であるのでそんなことも水に流れていく。

筋骨隆々の暑苦しい男達による喧嘩やそれを賭けとした無断賭博、娼婦を連れ込んでのやんちゃや豪快な飲み比べなど阿鼻叫喚の屋内では落ち着いて話をしている者など極僅か。

次第に、雰囲気飲み込まれていく極僅かに属していた客達が、新たな喧嘩や賭博、競合が至る所で勃発している現状に家主も何か言えればいいと思われるのだが、その家主自体が賭博に参加している為、もうどうしようもない。

この光景が、いつものことであるということは、初めてこの店に赴いた来客でも分かる事だった。

「ぬう、此処はいつもこんな風なのだ。慣れねば煩わしいだけだぞ。話を戻すが、まあ、お前の思うところも同感できる。ワシとてあの場から即刻逃げ出したかったぞ……」

「そうでしょ」

座していた椅子を蹴飛ばしながら机に身を乗り出し髭面男へと迫る狐顔の男。

狐男の顔は随分と上気しており、大分酔っていることが窺える。

「そもそも、僕はアディンセル様の命令に忠実に従ったっただけなのに、何であんな睨まれなけりやいけないんだよ。どう考えてもあの場面は僕が助けに入らなければ隊長が怪我してたでしょ。不条理だあ」

俗に言う絡み酒というやつだ。

とことん面倒臭い状況に返答と言う名の疑問を呈する。

「ああ、そうだな。お前の命令の事情は少し前に聞いていたし、確かにあの状況では我々には非は無いと言っても問題は無いだろうさ。それでもキシリア様はあの男と何かがあつたに違いないのだろうなあ……それが肉体的なものなのか精神的なもののかは我々には分からないが、キシリア様があそこまで男に執着を示したのは初めてなのではないか？」

狐男とは対照的で、酔いの片鱗さえも見せない髭男。

飲んでいる量は狐男と大差無いかそれ以上なのだが、顔色一つ変えていない。

完全な上戸である。

キシリアが男に執着を示したことが無いのは、父親であるヴァンガードの恩恵というかお節介というか、兎にも角にも父親の所為であることがほぼ確定している。

昔からお嬢様として教育してきたヴァンガードは乙女を守るのは鉄則とし、乙女が散ることが万が一でも無い様に男という存在から彼女を引き離したのだ。

だが、それも無駄な行為に終わってしまったのだが……

「そうですねえ。長い間あの方の身边警護兼、お目付け役兼、教育係兼、執事的立ち位置の人として接してきた僕ですら彼女のあん

な姿を見たことが無いですよ。まあ、アディンセル様の圧力であの人に寄ってくる馬鹿はいませんでしたから、そんな風に思うだけなのかもしれませんけどねぇ」

「思うだけであってほしいのだから。……それにしても、キシリア様の審問はまだ続いているのか」

「そうですねえ……かれこれ三、四時間は経過したんじゃないですか？」

「あんな所にそんな時間、尋問されていたのでは身体が持たんぞ。大丈夫なのか……」

「僕でしたら無理ですねえ」

満面の笑みで返す狐男。

暫しの沈黙。

狐男は乗り出していた身体を元の位置に戻し、今度は机に突っ伏しながら口だけでちびちびと器用に酒を飲んでいる。  
天井を三白眼で睨みつけている姿はなんとも滑稽。

「こらこら、そんな可笑しな顔をしたら折角の顔が台無しになるぞ」

「そんなこと欠片も思っていないでしょうに」

「はっはっは。バレたか」

「バレる以前の問題ですよ」

苦笑交じりに冗談を言う。

その場限りの時間稼ぎであり、話を逸らすための一つの方法。  
二回目の沈黙の後に二人同時に勢い良く酒を煽る。  
そして、同時に

吹いた。

「ボブツファアアアー！！」  
「ゴブツファアアアー！！」

当然、吹き上げられた酒は水滴となり、前方にいる男に着弾する。  
一方は見開いた三白眼に、一方はその自慢の髭と空気を吸い込む  
鼻腔に。

またしても二人は同時に苦痛に悶える。

「おおあああああつ！　目があ、目があああああつ！！　うおおあ  
あああああつ」

「ワシの自慢の髭があああああつ！　なんというつ　ボフォツ！  
！　い、いかん、髭に付いた水滴を吸ってしまうつ！！　く、苦し  
つ　ゴフウツー！！」

椅子から転げ落ち、床で転がり激痛に悶える狐男と、呼吸しようにも出来ないという状況に陥り髭に付着した水滴を一心不乱に掃<sup>はら</sup>っている髭男。

なんと醜<sup>かいぎやく</sup>く諧謔なことが。

「こんの糞髭があっ!!」

「それは此方のセリフだ。この糸目めっ!!」

そして、しょうもない罵倒を交わす。

「あああっ?!」

「あああっ?!」

この時、二人は完全に酔ってしまっていた。  
場の雰囲気にも、酒にも。

その所為なのだろう。

普段は、第六大隊の中では比較的冷静な方であるこの二人。  
そんな二人が大乱闘に発展してしまったのは。



夜。

庶民の街の夜は喧騒に包まれる。

あちらこちらでの夜店から上機嫌な笑い声や、喧嘩の音。  
屋内から漏れ響く軽快な音楽に合わせて踊る人々の足音。  
酒盛りの最中の大合唱。

道行く光景はどれも微笑ましく、温かい。

心の深淵へと沈み込んだ、明るく気高い気丈が再び顔を出す。  
目深に被った外套を勢い良く拭い去り、そして、前方に投げた。

「ああっ！！」

男か女が聞いただけでは判断できない中性的な声音を発し、自分で投げ捨てた外套をあたふたと拾いに行く。

「何で投げたんだろうか？」

自身の突拍子も無い行動に自分自身で疑問を持ちながら喧騒の中を突き進む。

足取りは先ほどよりも軽い。

軽快なステップを踏み締め、壮快に足を振り上げる。

整備された道では無い、石や岩が地面から隆起した険しくも猛々しい原道。

目的の場所へと到着するまで、その軽快なステップは止むことは無かった。

「……すごい、久しぶりだな」

見上げるのは仰々しく飾られた店の看板。  
杯を振り上げ、腕を組み交わしている逞しい腕をした男二人。

その間に卵と薄切りにされた肉が盛り付けられた皿がある。

「よし」

両の頬を景気良く叩き、気合を入れる。

そして、放浪者は酒屋の屋内へと入っていった。

視認したのは、殴りあう髭男と狐顔の男二人と、その周りに群がり囃し立てる阿呆共。

そして、その阿呆共の賭けに威勢よく乗って調子に乗っている旧友の姿だった。



## 第二章式記「酒、酒、酒え！！」（後書き）

クロニウス神国は神権政治に近い国家であるだけで、宗教統治をしている訳ではない。したがって貴族などが存在している。

筈……。 （宗教統治でも貴族って存在するのかな？ よくわからん）  
何か変だったら指摘下さい。 お願いします。

お気に入り登録や感想を頂けると嬉しさのあまりワルツを踊りだします。

## お知らせ

更新を一時休止させて頂きます。

理由は多々あるのですが、

もうちよつとちゃんとプロットを練ろうということです。

安易な設定や構成の仕方により続きが書きづらくなったということが要因です。

えゝともしかすると新しくまた作り直すかもしれません。

お気に入り登録や感想、評価を頂いた方々には大変申し訳ないのですが

某戦記さんのように改訂版として出すかもしれません。

本当にすいませんでした。

その代わりといったは難ですがもう一つの小説。

結末の無い絵本

を不定期にですが更新させていただきます。

一人称なので嫌いな方なども多々おられるかと存じ上げますがご了承ください。

本当に申し訳ありません。

出来るだけ早めに戻って参ります。

お知らせ その？ 二月一日再度更新 - new -

銀の首輪の小英雄 改稿版 を投稿しました。

一ヶ月もしないうちに帰って参りました。  
設定を色々と変え、終わり方を幾つか用意しました。  
プロットも大分出来上がり…  
まだまだ不定期更新になるような気がしてならないです。

現時点でも言える変更点

主人公の牢獄での扱いや偉丈夫との掛け合い（？）の追加  
キシリアの男口調統一。

第六大隊と竜の邂逅場面を大幅に変えた。

放浪者の名前が決まったっぽい

やっとかさ国の地域状況＆周辺諸国の状況と名前が決定。

第一～第八大隊の役割、敬称（異名？）、などが大体固まった。

- new -

第一～第八大隊の隊長、副隊長（幹部級）の人名が名前だけ決定（  
家名はまだ） - new -

各国の外交的特徴等々を一新（？） - new -



主人公とフェルニゲシュの邂逅、その後を大幅改編 - new -  
加筆 e t c . . . - new -

大幅に加筆&修正or編集が現在進行中。 進行状況：第二章一話まで - new -

現状 投稿してあった第二章までは大体の編集or加筆が  
終了しました。（一章の細かな場面除く）  
が、何分忙しいもので投稿はいまだ未定です。  
落ち着いたら一話ずつ順々に投下していきたいと思います。  
- new -

大幅に場面などを編集しまくったので、全くの別物になるやもしれ  
ませぬのでご了承ください。  
編集が終了次第、改稿版のほうへ連続投稿します。  
ご迷惑をお掛けして本当に申し訳ありません。

ぶつちやけると、このお話はある地域（現実）での神話（？）の  
「民話（？）」から色々拝借しております。故に探そうと思えば直ぐ  
に出てきます（主にグーグル先生）

知りたいと思う人がいれば探してみても良いとは思いますが、今  
後の展開がもしかしたら（ここ強調）分かってしまうかもしれません  
のでオススメはしかねます。

ご理解頂けます様、御了承願います。

お知らせ その? 二月一日再度更新 - new - (後書き)

プロットとか練ってから書けよと怒られました。 - new -  
すいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4884o/>

---

銀の首輪の小英雄

2011年3月27日21時54分発行